

EaseUS[®] Todo Backup

ユーザーガイド



目次

EaseUs Todo Backup.....	- 7 -
概要.....	- 7 -
本マニュアルの使い方.....	- 7 -
EaseUS Todo Backup 5.6新機能.....	- 8 -
はじめに.....	- 9 -
ハードウェア動作環境.....	- 9 -
システム動作環境.....	- 9 -
対応ファイルシステム.....	- 9 -
対応ハードディスク.....	- 10 -
インストール・アンインストール.....	- 10 -
エディション比較.....	- 11 -
製品紹介.....	- 13 -
バックアップ.....	- 15 -
システムバックアップ.....	- 15 -
ディスク/パーティションのバックアップ.....	- 17 -
ダイナミックボリュームのバックアップ.....	- 19 -
セクタバイセクタ方式のバックアップ.....	- 19 -
ファイルのバックアップ.....	- 20 -
Outlookのバックアップ.....	- 23 -
スケジュールバックアップ.....	- 25 -
スケジュール設定.....	- 25 -
スケジュール通知.....	- 28 -

バックアップオプション.....	- 28 -
圧縮.....	- 28 -
パスワード.....	- 29 -
分割.....	- 30 -
優先度.....	- 30 -
Eメール通知.....	- 31 -
コマンド.....	- 32 -
オフサイトコピー.....	- 32 -
速度.....	- 33 -
バックアップ管理.....	- 33 -
スケジュールプランの設定値変更.....	- 36 -
増分/差分バックアップ.....	- 37 -
バックアップポリシー.....	- 37 -
既存イメージのクリーンアップルール.....	- 40 -
NAS管理.....	- 41 -
復元.....	- 42 -
システムの復元.....	- 43 -
ディスクパーティションの復元.....	- 43 -
ダイナミックボリュームの復元.....	- 47 -
セクタバイセクタ方式の復元.....	- 48 -
ファイルの復元.....	- 48 -
Outlookの復元.....	- 50 -
ユニバーサルリストア.....	- 52 -

クローン.....	- 54 -
ディスククローン.....	- 54 -
パーティションクローン.....	- 55 -
ダイナミックディスク/ボリュームのクローン.....	- 56 -
セクタバイセクタ方式のクローン.....	- 56 -
Advanced Serverエディション専用ツール.....	- 57 -
Exchange Serverのバックアップ.....	- 57 -
Exchangeのバックアップ.....	- 57 -
Exchangeの復元.....	- 60 -
MS SQL Serverのバックアップ.....	- 62 -
ユーザーログイン.....	- 63 -
ホーム.....	- 63 -
バックアップ.....	- 64 -
復元.....	- 65 -
エクスポート/インポート.....	- 66 -
ログ.....	- 67 -
テープデバイスへのバックアップ.....	- 67 -
スナップショット.....	- 68 -
スナップショットの利点.....	- 69 -
スナップショットの作成.....	- 69 -
スナップショットの削除.....	- 70 -
スナップショットによるシステムの復元.....	- 71 -
スナップショットを無効にする.....	- 71 -

ツール.....	- 71 -
イメージのチェック.....	- 71 -
ブータブルディスクの作成.....	- 72 -
Linuxブータブルディスク.....	- 73 -
WinPEブータブルディスク.....	- 73 -
データの消去.....	- 73 -
イメージのマウント/アンマウント.....	- 74 -
イメージの変換.....	- 75 -
テープ管理.....	- 75 -
Pre-OSを有効/無効にする.....	- 76 -
Pre-OSモード.....	- 76 -
WinPEとWindowsの違い.....	- 77 -
Windowsシェルコマンド.....	- 77 -
デバイス管理.....	- 78 -
MBR修復、パーティションのチェック.....	- 79 -
iSCSIイニシエーター.....	- 79 -
PXE Server.....	- 80 -
ログ.....	- 82 -
その他の操作.....	- 83 -
処理完了後コンピューターをシャットダウンする.....	- 83 -
Windowsエクスプローラーでイメージ内部を参照.....	- 83 -
Windowsエクスプローラーからバックアップを開始.....	- 84 -
サポート.....	- 84 -

トラブルシューティング.....	- 86 -
用語集.....	- 91 -

EaseUS Todo Backup

概要

本製品を選択、ご使用いただきまして誠にありがとうございます。

EaseUS Todo Backup はシステムクラッシュ、パーティション/ディスクの破損、ウイルス感染、データ消失など、ほぼすべてのコンピューター・ソフトウェアの問題が発生しても、簡単に復元できる信頼のバックアップをご提供します。

本マニュアルの使い方

本製品の使用中、機能やオプションなどでわからないことがある場合、F1キーを押すと、操作の状況に応じた説明が表示されます。

本マニュアルは大きく分けて以下の4部で構成されています：

1. EaseUS Todo Backup

本製品の簡単な解説と、最新バージョンの新機能についての基本的な情報について紹介しています。

2. はじめに

この章では、本製品のハードウェア要件およびシステム要件、対応しているストレージデバイス、インストール/アンインストールの方法について説明しています。

3. 使用方法

この章では、本製品の各機能の操作手順およびいくつかの操作例を説明しています。目次の「バックアップ」から「ログ」までの章が該当します。

4. その他の情報

過去に例のあったバグ、ソフトウェアの問題についての解決法は、「[トラブルシューティング](#)」の

章で見つかるかもしれませんが。専門用語などは「用語集」の章をご参照ください。

必要な情報がヘルプに見つからない場合、[サポートチーム](#)までお問い合わせください。

EaseUS Todo Backup 5.6の新機能

バックアップタスク/プランの効率を高めるため、バージョン5.6では大幅な改善をおこないました。

新機能

- 新インターフェイスと新クローン過程では操作時間が節約でき、エラーが減少しました。
- Mapi for Exchange診断ソフトにより、Exchangeのバックアップが失敗した時、エラーを診断します。
- Live Mail通知に対応しました。

改善点

- ユーザーがエラー原因を確認するために、プログラムにヘルプリンクができました。
- Windows 8のVSSでのバックアップエラーが改善されました。
- VSS providerが他のソフトと競合する問題が解決されました。
- 日誌内容が追加されました。
- Copy-on-write mechanismエラー注意が改善されました。
- FTP対応の改善
- Exchangeバックアップ中のエラーが修正されました。
- バージョン、バックアップ中のエラーが修正されました。

はじめに

ハードウェア動作環境

最小システム要件

CPU : Intel x86系、500MHz以上のプロセッサ

メモリ : 1GB以上のRAM容量

ハードディスク : 1GB以上の空き領域

ROMドライブ : ブータブルメディアの作成にCD-R/RW、DVD±R/RW、DVD+R DLドライブが必要

その他 : マウス、キーボード、カラーモニター

システムの動作環境

Windows XP, Windows Vista, Windows 7, Windows 8, Windows Server 2003/2008,

Windows Server 2012.

対応ファイルシステム

以下のファイルシステムに対応しています。

FAT12、FAT16、FAT32、NTFS

上記以外のファイルシステムは、本製品では「**その他**」と表示され、セクタバイセクタ方式でのバックアップがおこなわれます。

対応ハードディスク

インターフェイス：IDE、EIDE、SATA、ESATA、ATA、SCSI、iSCSI、USB 1.1/2.0/3.0、FireWire

インターフェイスのディスクに対応。

最大ディスク容量：容量 **最大4TB**までのディスクに対応。

メディア：CD-R/RW、DVD±R/RW、DVD+R DLメディアへのバックアップに対応。

インストール/アンインストール

インストール方法：

1. セットアップ用のファイルをダブルクリックしてインストーラーを起動します。【次へ】をクリックします。
2. **使用許諾契約**の画面が表示されます。よくお読みになり、**内容に同意のうえ**【次へ】をクリックします。
3. 「**EaseUS Todo Backup**」を選択します。EaseUS Todo Backup Central Management Consoleでの管理対象のコンピューターにインストールする場合、「Central Management 用ビルトインアカウントを作成」も選択します。
4. インストール先を初期設定から変更する場合は、【参照】をクリックします。【次へ】をクリックします。
5. プログラム起動用のショートカットを作成する場合は、チェックボックスにチェックを入れ、【次へ】をクリックします。
6. EaseUS Todo Backup で作成される個人データの保存先を選択します。
7. 【次へ】をクリックします。セットアッププログラムがプログラムの実行に必要なファイルをハードディスクにコピーし、インストールが完了します。

アンインストール方法：

1. Windowsスタートメニューをクリックし、設定 > **コントロールパネル**の順にクリックします
(Windows 7/Vista の場合、**コントロールパネル** をクリックします)。
2. プログラムの追加と削除をダブルクリックします(Windows 7/Vista の場合、**プログラムと機能**をダブルクリックします)。
3. プログラム一覧から「**EaseUS Todo Backup**」を選択し、**【削除】**をクリックします(Windows 7/Vista の場合、右クリックして **【アンインストール】** をクリックします)。
4. 上記がうまくいかない場合、Windowsスタートメニューをクリックし、**すべてのプログラム > EaseUS Todo Backup 5.6 > EaseUS Todo Backup 5.6をアンインストールする** の順にクリックし、アンインストールウィザードにしたがってアンインストールしてください。

エディション比較

EaseUS Todo Backup には5種類のエディションがあります。エディションによって許諾内容、利用可能な機能、使用の範囲がそれぞれ異なります。

Homeエディション - ホームユーザー向けの有料版です。Workstationエディションよりも機能が少ないです。

Workstationエディション - デスクトップパソコンやノートパソコンのユーザー向けの有料版です。利用可能な機能がFreeエディションよりも多いです。

Serverエディション - Windows Server製品向けの有料版です。少しだけ機能制限があります。

Advanced Serverエディション - Serverエディションに、Windows Serverコンポーネント (Exchange Server、SQL Server)への対応が追加されています。

Technicianエディション - 使用方法に制限なく、優待技術サービスの提供が可能なエディションです。スナップショットの機能のみ利用できません。

各エディションに体験版プログラムがあります。評価目的に、15日間無料でお使いいただけます。

エディション機能比較表

	Home	Workstation	Server	Advanced server	Technician
ディスク&パーティションバックアップ	✓	✓	✓	✓	✓
ファイルバックアップ	✓	✓	✓	✓	✓
増分/差分バックアップ	✓	✓	✓	✓	✓
ダイナミックボリュームのバックアップ/クローン		✓	✓	✓	✓
スケジュール作成	✓	✓	✓	✓	✓
システムバックアップ	✓	✓	✓	✓	✓
バージョンの古いバックアップの自動削除	✓	✓	✓	✓	✓
スナップショット	✓				
ユニバーサルリストア		✓ *	✓ *	✓ *	✓
SQL Server のバックアップ				✓	✓
Exchange Server のバックアップ				✓	✓
テープへのバックアップ		✓	✓	✓	✓
WinPEブータブルディスク	✓ *	✓ *	✓ *	✓ *	✓
ブイOSモードの使用	✓	✓	✓	✓	✓
イメージ変換ツール		✓	✓	✓	✓
Windowsエキスプローラからバックアップの実行	✓	✓	✓	✓	✓
MicrosoftサーバーOSへの対応			✓	✓	✓

*Windows Automated Installation Kit(AIK)をインストール後、WinPEブータブルディスクの作成、またはWinPE ISOイメージの出力をすることで、体験版プログラムでも「ユニバーサルリストア」「WinPE ブータブルディスク作成」をおこなえます。

製品紹介

エディションごとに使用できる機能が異なるため、お使いの製品の【ホーム】タブの内容が下図と異なる場合があります。下図はHome エディションの【ホーム】タブです。



Workstation、Serverエディション、および体験版プログラムでは、【ホーム】タブの内容が **Free** エディションと同じです。

上位サーバー製品の管理者には、サーバーのバックアップにさらに多くの機能が必要とされます。本製品の **Advanced Server、Technician** 両エディションの【ホーム】タブは、2種の有用なサーバーバックアップツールをはじめとした追加機能の分、項目数が増えます。



バックアップ

バックアップ

「バックアップ」や「バックアップ作業」とは、重要なデータのコピーを作成することです。予期せぬコンピューター災害の発生時、これらコピーを使用して以前の良好な状態に戻すことができます。したがって、システム障害やデータロス発生時の対応としてデータを復元できるよう備えておくことが、バックアップの主な目的とも考えることができます。

クローンとの比較

クローンとバックアップはよく混同されますが、まったく異なるものです。「バックアップ」の処理では、選択された全データが1つのPPBDイメージファイルに圧縮されるのに対し、「クローン」ではデータはすべて別のディスクに直接転送されます。容量の小さい古いハードディスクから、大容量の新しいハードディスクに交換したいというときにクローンの機能はとても役に立ちますが、単に予備のコピーを作成したいという場合には、バックアップを選択した方がよいでしょう。

【ご注意】

バックアップ処理が高速かつ確実に成功するよう、バックアップ処理を開始する前に他のアプリケーションを可能な限りすべて終了してください。また、イメージ対象(バックアップ元)のパーティションやディスクにイメージファイルの保存を試みることは、絶対にしないでください。

システムバックアップ

この機能を使うと、OSのバックアップを超高速かつ簡単に行うことができます。将来のシステムの復元に備えてどのパーティションをバックアップする必要があるのか、本製品が選択の手助けをします。【ホーム】タブの「システムバックアップ」をクリックしてください。



1. タスク/プラン名と説明を入力します。
2. システムバックアップイメージファイルの保存先を決定します。
3. 設定が完了したら、**【進む】**をクリックします。スケジュール設定を行っていない場合は、この後すぐにバックアップが実行されます。

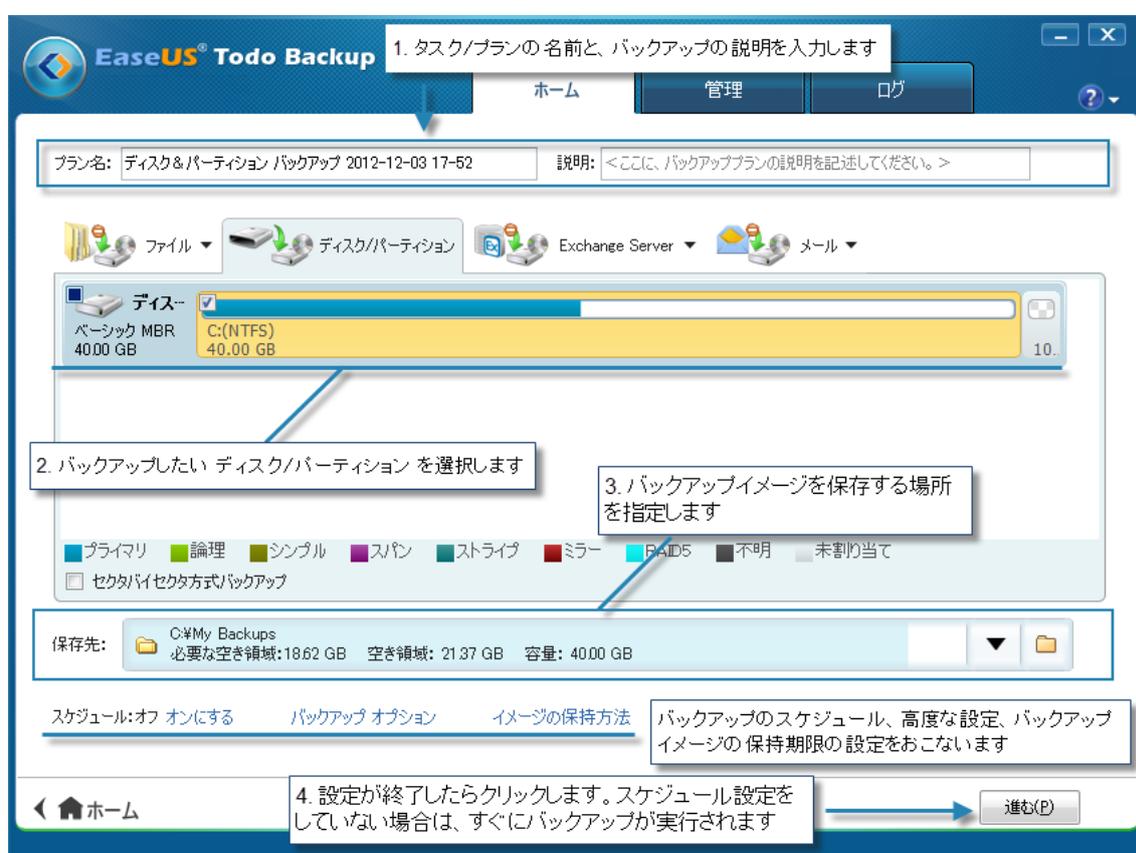
この機能を使うと、システムバックアップのタスクを効率的におこなえます。たとえば、1日1回指定時刻にシステムバックアップを取るといった長期のバックアッププランには、システムバックアップスケジュールを作成するのがよい選択でしょう。

バックアップ設定は「ディスク&パーティションバックアップ」と同じですので、詳しくは、「[ディスク&パーティションバックアップ](#)」の章をご参照ください。

ディスク/パーティションのバックアップ

ディスクバックアップでは、パーティション/ディスク上のすべてのデータをイメージファイルに転送します。【ホーム】タブの「データバックアップ」をクリックして、次に【ディスク/パーティション】タブに切り替えます。

1. タスク/プラン名と説明を入力します。どんな内容のバックアップなのか後で見分けられるようなタスク名にしたり、説明欄を適宜利用すると、将来データを復元する際、大いに役立つでしょう。



「バックアップオプション」をクリックすると、高度な設定値の調整をおこなえます。詳しくは、「バックアップオプション」の章をご参照ください。

「オンにする」をクリックすると、バックアップをスケジュール実行するよう指定できます。詳しくは、「スケジュールバックアップ」の章をご参照ください。

「イメージの保持方法」をクリックすると、イメージのクリーンアップルールを構成し、イメージファイルの管理を自動化できます。

2. バックアップ元のディスク/パーティションを選択します。この機能をはじめて使用するとき、初期設定ではシステムパーティションが選択されています。2個以上の異なるハードディスクから複数のパーティションをバックアップ元に指定することができます。

「セクタバイセクタ方式バックアップ」にチェックを入れると、選択したパーティションやハードディスクの全セクターをバックアップします。詳しくは、[「セクタバイセクタ方式バックアップ」](#)の章をご参照ください。

3. イメージファイルの保存先を決定します。ローカルディスク、ネットワークフォルダー、テープドライブを使用できます。下向き三角形(▼)をクリックすると、バックアップ先フォルダーの履歴が表示されます。



「NASデバイス」を右クリックすると、NASデバイスを追加できます。詳しくは、[「NAS管理」](#)の章をご参照ください。

4. 設定が完了したら、**【進む】** をクリックします。スケジュール設定をおこなっていない場合は、この後すぐにバックアップが実行されます。

ダイナミックボリュームのバックアップ

ダイナミックボリュームは、ダイナミックディスク上にあるボリュームです。この種のハードディスクは、LDM(論理ディスクマネージャ)データベースでボリュームを管理します。ベーシックディスクと比べると、ダイナミックディスクには複数の種類があります。ミラーボリュームのデータ冗長性、RAID-5ボリュームのフォールトトレラント機能など、ほとんどのタイプにはデータストレージの拡張機能があります。

バックアップ処理は通常の「ディスク&パーティションバックアップ」のタスクのときとほぼ同じで、バックアップ元を選択する箇所のみ違いがあります。ダイナミックボリュームは実際には複数のダイナミックディスク上に存在するボリュームですが、本製品のディスク一覧では、すべてのダイナミックボリュームはひとつのシングルダイナミックディスクとして表示されます。

【ホーム】 タブの「**データバックアップ**」をクリックして、次に **【ディスク/パーティション】** に切り替えます。すべての処理は通常の「ディスク&パーティションバックアップ」のタスクのときとほぼ同じですので、詳細については、**「ディスク&パーティションバックアップ」**の章をご参照ください。

セクタバイセクタ方式のバックアップ

セクタバイセクタ方式のバックアップでは、選択したパーティションやハードディスクのセクター単位のイメージを作成します。データ領域のセクターだけでなく、空き領域のセクターもバックアップされます。その結果、データはまったく圧縮されないため、通常のバックアップよりもイメージのサイズは大きくなり、処理時間も長くなります。

ファイルバックアップ

ファイルバックアップでは、指定したファイルやフォルダーをイメージファイルに転送します。【ホーム】タブの**データバックアップ**をクリックします。初期設定で【ファイル】タブが表示されています。

バックアップするファイル/フォルダーの選択方法は2つあります。【ファイル】タブ上をクリックすると切り替えられます。



1. タスク/プラン名と説明を入力します。どんな内容のバックアップなのか後で見分けられるようなタスク名にしたり、説明欄を適宜利用すると、将来データを復元する際、大いに役立つでしょう。

【バックアップオプション】をクリックすると、高度な設定値の調整をおこなえます。詳しくは、【バックアップオプション】の章をご参照ください。

【オンにする】をクリックすると、バックアップをスケジュール実行するよう指定できます。詳しくは、【スケジュールバックアップ】の章をご参照ください。

「**イメージの保持方法**」をクリックすると、**イメージのクリーンアップルール**を構成し、イメージファイルの管理を自動化できます。

計算機のボタンをクリックすると、選択済みのファイルのバックアップに必要な空き領域を計算できます。

2. バックアップ元のファイル/フォルダーを選択します。

1) 左側に表示されるフォルダーツリーから、ファイル/フォルダーを選択します。フォルダーをクリックすると、ツリーを開いてバックアップ対象のファイルを個々に探すことができます。フォルダーの左側にあるチェックボックスにチェックを入れると、そのフォルダーおよびそのサブフォルダー内のすべてのファイルをバックアップ対象に選択できます。右側に表示される一覧には、ツリーで選択したフォルダー内のサブフォルダーおよびファイルが詳細表示されます。



2) バックアップするファイルをファイルの種類(拡張子)で指定します。ウィンドウ上にはよく使用されているファイルの種類が6カテゴリに分かれて表示されます。カテゴリ名の右上にあるチェックボックスにチェックを入れると、そのカテゴリ全体をバックアップ対象に選択できます。「編集」をクリックすると、カテゴリの詳細を開き、特定のファイルの種類を選択できます。

バックアップしたいファイルの種類が初期設定のどのカテゴリの中にもない場合、カテゴリの先頭にある【追加】をクリックし、カテゴリとファイルの種類(拡張子)を新規登録することができます。



3. イメージファイルの保存先を決定します。ローカルディスク、ネットワークフォルダー、テープドライブを使用できます。下向き三角形(▼)をクリックすると、バックアップ先フォルダーの履歴が表示されます。



「NASデバイス」を右クリックすると、NASデバイスを追加できます。詳しくは、[「NAS管理」](#)の章をご参照ください。

4. 設定が完了したら、**【進む】**をクリックします。スケジュール設定をおこなっていない場合は、この後すぐにバックアップが実行されます。

Outlookのバックアップ

Microsoft OutlookはMicrosoft社の個人情報管理ツール(PIM)です。Microsoft Officeスイート製品の一部分、あるいは単独の1アプリケーションとして販売されています。

主にメールソフトとして利用されていますが、カレンダー、タスク管理、連絡先管理、ノート、履歴、ウェブブラウジングの機能も搭載しています。

〔ホーム〕タブの「データバックアップ」をクリックして、次に〔メール〕タブに切り替えます。

1. タスク/プラン名と説明を入力します。どんな内容のバックアップなのか後でわかりやすいタスク名にしたり、説明欄を適宜利用すると、実際にデータを復元する際、大いに役立つでしょう。



「バックアップオプション」をクリックすると、高度な設定値の調整をおこなえます。詳しくは、「バックアップオプション」の章をご参照ください。

「オンにする」をクリックすると、バックアップをスケジュール実行するよう指定できます。詳しく

くは、「[スケジュールバックアップ](#)」の章をご参照ください。

「[イメージの保持方法](#)」をクリックすると、[イメージのクリーンアップルール](#)が構成され、イメージファイルの管理を自動化できます。

[計算機のボタン](#)をクリックすると、選択済みのファイルのバックアップに必要な空き領域を計算できます。

2. バックアップしたいOutlookデータフォルダーを選択します。メールボックス全体の選択や、フォルダー、連絡先、カレンダーなどの個別選択ができます。

3. イメージファイルの保存先を決定します。ローカルディスク、ネットワークフォルダー、テープドライブを使用できます。下向き三角形(▼)をクリックすると、バックアップ先フォルダーの履歴が表示されます。



「NASデバイス」を右クリックすると、NASデバイスを追加できます。詳しくは、[「NAS管理」](#)の章をご参照ください。

4. 設定が完了したら、**【進む】**をクリックします。スケジュール設定をおこなっていない場合は、この後すぐにバックアップが実行されます。

【ご注意】

Outlookバックアップは、Microsoft Outlook 2003/2007/2010とOutlook Expressのバックアップに対応しています。

スケジュールバックアップ

あとで実行するか、一定期間ごとに実行するか選択します。バックアップ指定時刻にコンピュータが起動していれば、スケジュール設定したバックアップはすべて自動的におこなわれます。

スケジュール設定

バックアップのスケジュール実行には5種類の方法があります。

あとで実行 - 指定日の指定時刻になったときにバックアップを実行します。

毎日

「バックアップ実行時刻」または「開始時刻と時間間隔」を指定しておき、毎日1回～複数回バックアップを実行します。

時刻 - バックアップを指定時刻におこないます。+マークをクリックすると、最大5回まで時刻を指

定できます。「×」マークをクリックすると、指定済みの時刻を削除できます。

間隔 - 開始時刻、終了時刻、時間間隔を指定してバックアップを実行します。たとえば、開始時刻「6:00 AM」、終了時刻「10:00 AM」、時間間隔「2:00」で指定した場合、バックアップは午前6時、午前8時、午前10時の計3回実行されます。

毎週

「曜日」と「バックアップ実行時刻」を指定しておき、バックアップを実行します。

曜日 - バックアップを実行する曜日を指定します(複数曜日を指定可能)。

毎月

「バックアップ実行時刻」と、「バックアップ実行日」を指定し、毎月1回~複数回バックアップを実行します。

指定日 - バックアップ実行日を、数字(「毎月○日」形式)で指定します(複数日を指定可能)。

指定曜日 - バックアップ実行日を、曜日(「毎月○回目の△曜日」形式)で指定します。

バックアップ実行時刻の指定が必要です。

イベント時

コンピューターの起動時やシャットダウン時など、システムイベントの発生時にバックアップを実行します(Exchange バックアップでは利用できません)。

システム起動時 - システムの起動時に自動的にバックアップが実行されます。

システムシャットダウン時 - システムのシャットダウン時に自動的にバックアップが実行されます(このオプションは、Windows Vista以降のバージョンでは利用できません。)。

ユーザーログオン時 - バックアップスケジュールを作成したユーザーがログオンするときにバックア

ップが実行されます。

ユーザーログオフ時 - バックアップスケジュールを作成したユーザーがログオフするときにバックアップが実行されます。

1日1回のみ - 条件に指定したイベントが1日に複数回発生したとしても、2回目以降のイベント発生時にはバックアップを実行しなくなります。

指定日 - このプランが有効になる日付を指定します。

電源の故障やコンピューターの電源オフなどの原因でバックアップ実行の指定時刻が経過してしまい、バックアップのやり残しが生じてしまった場合でも、「**システム停止中にバックアップ実行時刻が経過した場合、起動時に実行**」にチェックを付けておくと、コンピューターの復帰後、やり残されたバックアップが自動的に実行されます。

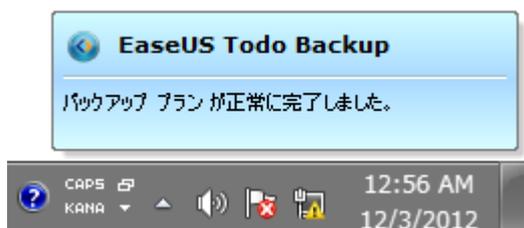
増分バックアップを編集している場合、「**毎日/毎週/毎月の初回は次のモードでバックアップする**」にチェックを入れると、増分バックアップ周期の初回バックアップ分について「フルバックアップ」または「差分バックアップ」を指定できるようになります。増分バックアップの弱点を補い、バックアッププランの安定性と安全性を向上させます。

【ご注意】

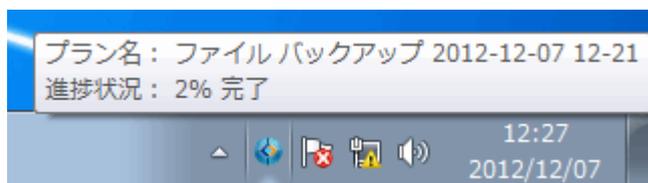
ログオフ/スリープ/休止時でもスケジュールどおり確実にバックアップが実行されるようにするため、本製品でバックアップスケジュールを作成するユーザーには管理者権限が必要です。また、作成済みのバックアップスケジュールは管理者権限で実行されます。管理者アカウントのパスワードをお持ちの場合、「**管理者アカウント**」欄にユーザー名とパスワードを入力しておいてください。

スケジュール通知

スケジュールバックアップが開始すると、タスクバーの通知領域にトレイアイコンが表示され、下図のように通知メッセージがポップアップ表示されます。



トレイアイコンにマウスカーソルを近づけると、現在実行中のバックアップの**プラン名**、**進行状況**が表示されます。



トレイアイコンを右クリックするとメニューが表示され、バックアップの**キャンセル**ができます。

バックアップオプション

バックアップを開始する前に、高度な設定値の調整をおこなえます。この章では、各設定値を詳しく説明していきます。設定した値は、次回以降のバックアップタスク/プランの既定値として使用されます。

【ご注意】

増分バックアップと差分バックアップは、ベースとなるフルバックアップからすべての設定値を継承します。

圧縮

バックアップイメージファイルは圧縮できます。以下の圧縮レベルを指定できます：

なし - データは圧縮されずバックアップイメージにまとめられます。圧縮されない分、バックアップイメージファイルのサイズは大きくなります。

標準 - 推奨するデータ圧縮レベルです。

中 - データ圧縮のため、バックアップイメージの作成にかかる時間が長くなります。

高 - バックアップイメージの作成に掛かる時間はさらに長くなります。作成されるイメージファイルのサイズは、他の圧縮レベルと比べ最も小さくなります。

【ご注意】

バックアップ対象の多くが「JPG」「PDF」「MP3」などの形式のファイルの場合、圧縮レベル「高」を選択したとしても、バックアップイメージファイルのサイズはほとんど小さくなりません。それらの形式のファイルにはすでにデータ圧縮がおこなわれているからです。

パスワード

バックアップイメージファイルにパスワードをかけることができます。初期設定では、パスワード設定は「なし」です。

「**パスワードの入力**」欄にパスワードを入力します。パスワードの文字数制限は1文字以上15文字までです。パスワードにはすべてのASCIIコードが使用できます。

同じパスワードをもう一度「**パスワードの確認**」欄に入力します。

パスワード保護には、AES256アルゴリズムを採用しています。

【ご注意】

認定ユーザーのみのアクセスを許可するため、パスワード保護をかけたバックアップイメージから復元を実行する際、パスワードの入力が必要になります。パスワード保護が機能していることを試験的に実行し、十分ご確認の上、実際に運用してください。

分割

さまざまなストレージメディアのサイズに合うよう、バックアップイメージファイルを複数ファイルに分割することができます。

自動 - 分割サイズはバックアップ先に指定したストレージメディアのファイルシステムにしたがって決定されます。

手動 - リストの中からメディアの種類を選択するか、分割ファイル一つあたりのサイズを入力して指定します。(単位はMBです。サイズは**最低50MB**で指定してください。)

優先度

Windows はマルチタスクOSです。Windows環境ではさまざまなアプリケーションが同時に実行されています。〔優先度〕タブでは、他のアプリケーションに対するバックアップ処理の優先度の高低をWindowsに伝えます。

標準 - バックアップ処理のためにOSから割り当てられるシステムリソースが少なめになります。バックアップタスクが緊急でない状況や、他のアプリケーションもいくつか同時に実行しなくてはならない状況では、この優先度が最善でしょう。

中 - バックアップ処理は、他のアプリケーションと同等の優先度で実行されます。

高 - バックアップ処理の優先度が最も高くなり、他のアプリケーションよりも高速に実行されます。ただし、その間は他のアプリケーションのパフォーマンスが著しく低下します。

【ご注意】

バックアップの速度は、システム環境やハードウェア構成によっても異なるという点にご注意ください。

Eメール通知

Eメール通知の機能を使うと、あらかじめ指定した電子メールアドレス宛にバックアップタスク/プランの詳細情報を送信します。

Eメールアドレス - 通知メールの受信に使用するメールアドレスを指定します(複数指定するには半角カンマで区切ります)。

サーバー名 - 通知メールの送信に使用するメールサーバーを指定します。

ポート - メールサーバーのポート番号を指定します。

ユーザー名/パスワード - メールアカウントのユーザー名/パスワードを入力します。

【テストメッセージ送信】 - 通知メールの送受信ができるかテストしたいときに使います。

SSL/TLS - メールサーバーがSSL/TLSを使用している場合、このオプションを選択する必要があります。

追加通知設定

処理の成功時に通知 - 処理が正常終了したときに通知メールが送信されます。

処理の失敗時に通知 - 処理が失敗したときに通知メールが送信されます。

【ご注意】

Eメール通知の設定につきましては、Eメールサービスプロバイダーから提供されるヘルプやローカルメールサーバーの設定をご参照ください。

コマンド

バックアップタスク/プランの実行前または実行後に、自動でコマンドを実行できます。

プリコマンド - 指定のコマンドを、バックアップの前に実行します

ポストコマンド - 指定のコマンドを、バックアップの後に実行します。

コマンドを直接手入力で指定するか、【編集】をクリックして設定をおこないます。

コマンド - コマンドを直接入力で指定するか、【参照】をクリックしてバッチファイルまたは実行可能ファイルを選択します。

作業パス - バッチファイルまたは実行可能ファイルのあるパスを指定します。【参照】ボタンでファイルを指定した場合は自動で入力されます。

パラメーター - コマンドライン実行する際の**引数指定**をおこないます。

ユーザーコマンドが失敗したら操作を中止する - コマンドが不正終了したときや正常終了しなかったとき、バックアップ処理も自動的に中止します。このオプションは、**プリコマンド**に対してのみ利用可能です。

オフサイトコピー

バックアップイメージファイルのコピーをFTPサーバー上に作成します。この機能を有効にするには「有効にする」にチェックを入れます。

有効にする - チェックを入れると設定値の変更が可能になります。

FTPアドレス - FTPサーバーのアドレスを指定します。

ポート - FTP接続に使用するポートの番号を指定します。ポートはアプリケーション固有またはプロセッサ固有で、ソフトウェアは通信エンドポイントとして働くよう構成され、多重化サービスを提供し

ます。

ユーザー名 - FTPサーバーにログインするためのユーザー名を入力します。

【ご注意】

FTPサーバーがネットワーク内の全ユーザーに共有されている場合は、**匿名**を選択できます。

パスワード - FTPサーバーにログインするためのパスワードを入力します。パスワード不要の場合、入力する必要はありません。

リトライ回数 - プログラムがFTPサーバーに接続できないときに接続を何回再試行するか数字で指定します。

リトライ間隔 - 接続失敗後、次の接続再試行までに何秒の間をおくかを数字で指定します。

接続モード - ご利用のFTPの環境に応じ、**PORTモード**と**PASVモード**のどちらを使用するか選択します。

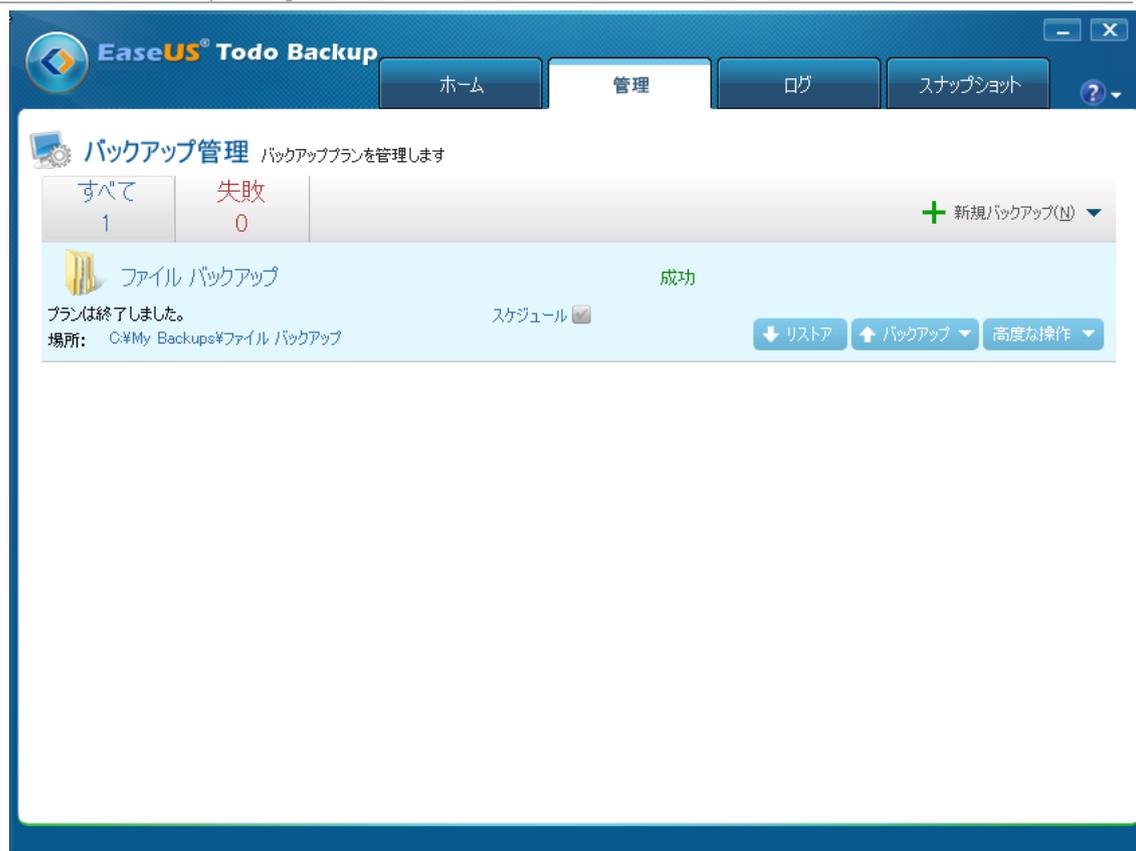
【接続テスト】 - 指定した条件での接続をテストしたいときに使います。

速度

ネットワーク転送速度 - ネットワーク転送速度を設定します。「0 Mbps」と設定した場合、速度制限なしになり、本製品がネットワーク接続リソースを最大限に利用するようになります。

バックアップ管理

正しく作成されたバックアッププランとバックアップタスクは、この管理画面上に一覧表示されます。



1. ここに、バックアッププランやタスクの名前が表示されます。タスク名をクリックすると、名前を編集できます。
2. バックアップスケジュールがオンの場合、次回のバックアップ実行予定時刻が表示されます。
3. バックアップイメージの保存先の確認と編集をおこなえます。
4. 最後におこなったバックアップの実行結果(成功/失敗)が表示されます。クリックすると詳細情報が表示されます。
5. 「スケジュール」をクリックすると、バックアップのスケジュール設定をおこなえます。バックアップのスケジュール実行のオン/オフを、チェックボックスで切り替えられます。

新規バックアップ

選択した種類のバックアップウィザードを呼び出します。

復元

選択したバックアップタスク/プランの復元処理を開始します。詳しくは「[復元](#)」の章をご参照くだ

さい。

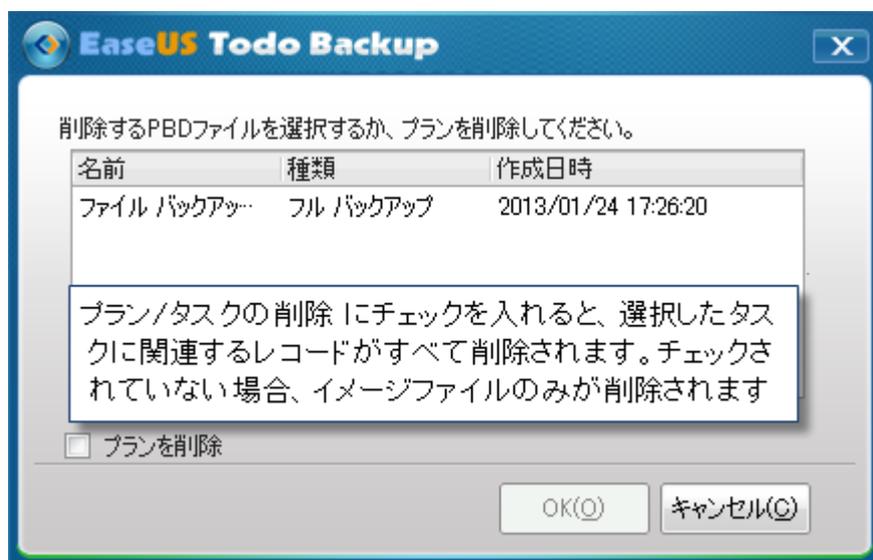
バックアップ

フル/増分/差分のいずれかを選択し、手動でバックアップを実行します。

高度な操作

タスク/プランの編集 - クリックすると詳細情報が表示されます。

バックアップの削除 - 削除したいバックアップイメージを選択します。(フルバックアップイメージを削除すると、それをベースとする増分イメージファイルも削除されます。) 「**プランを削除**」にチェックを入れた場合、まず、選択中のタスク/プランのレコードが削除され、次に、ポップアップウィンドウが表示され、イメージファイルを削除するかたずねられます。(レコードがなくなると、本製品上でプラン/タスクが表示されなくなります。) これに対して、「**プランを削除**」がチェックされていない場合、イメージファイルのみが削除されます。



イメージのチェック - 詳細は、「[イメージのチェック](#)」の章をご参照ください。

イメージの変換 - ディスクイメージファイルやパーティションイメージファイルを、VMwareやVirtual PCで利用可能な仮想ハードディスクファイル(VMDK形式、VHD形式)に変換します。VMware仮想ハードディスクファイルへ変換するには、VMwareのサイトで入手可能なパッチファイルが必要です。

スケジュールプランの設定値変更

バックアップタスク/プランを一覧から選択し、【高度な操作】 - **プランの編集** の順にクリックすると、スケジュールを編集できます。

ここでおこなう設定変更は、選択したプランでのみ、変更内容を保存した後で有効になるということにご注意ください。

【詳細】 - このタブでは、バックアップタスクの名前、説明欄を変更できます。**バックアップモード** を「フルバックアップ」「増分バックアップ」「差分バックアップ」に変更することができます。バックアップモードの違いにつきましては、「[バックアップポリシー](#)」の章をご参照ください。ディスク&パーティションバックアップのスケジュールの場合はさらにオプションがあり、以後のバックアップに「[セクタバイセクタ方式](#)」を使用するかどうか指定できます。

【内容】 - ファイルバックアップスケジュールでは、バックアップ対象のファイルの追加をおこなえます。バックアップ対象を減らす操作は、ディスク&パーティションバックアップ、ファイルバックアップのどちらのスケジュールもおこなえます。

【場所】 - 今後のバックアップ実行時におけるバックアップ先のパスを指定できます。バックアップ先のパスを変更する際、旧バックアップ先に存在する以前のバックアップイメージファイルを変更後の新しいバックアップ先に移動するか選択することになります。ここでバックアップイメージを新しいバックアップ先に移動しなかった場合、次回のバックアップは必ずフルバックアップでおこなわれます。

【結果】 **【イメージ】** - これら2つのタブの内容は変更できません。バックアッププランの基本情報の表示のみおこないます。

【スケジュール】 - バックアップスケジュールの実行日・時刻を新たに指定できます。スケジュール変更方法の詳細については、「[スケジュール設定](#)」の章をご参照ください。

【オプション】 - 既存のタスク/プランの設定変更をおこないません。ただし、**圧縮** と **パスワード** については表示のみで、変更はできません。詳細については [「バックアップオプション」](#) の章をご参照ください。

増分/差分バックアップ

【バックアップ】 をクリックすると、適切なバックアップモードを選んで直接実行できます。

増分バックアップでは、前回のバックアップ以降に変更されたファイルのみバックアップされます。(「前回のバックアップ」の種類は、フルバックアップ、増分バックアップ、差分バックアップのどの可能性もあり得ます。)バックアップタスクを高頻度で実行する必要がある場合や特定の時点へのロールバックが必要な場合に特に役立ちます。個々の増分バックアップイメージのファイルサイズは、フルバックアップイメージや差分バックアップイメージと比べずいぶん小さくなります。

差分バックアップも、時間とディスク領域を節約するバックアップ方法ですが、増分バックアップとの違いは、前回のフルバックアップからの変更をバックアップするところです。

【ご注意】

増分バックアップイメージと差分バックアップイメージは、ベースとなるバックアップタスクからすべての設定値とオプションを継承します。

バックアップポリシー

3種類のバックアップの違いがわかっていないと、最適なバックアッププランを立てることができないかもしれません。どのバックアップを使用するか決める前に、各バックアップ方法についてよく学んでおくのが最善です。

フル - バックアップ対象に選択した全てのファイルがバックアップされます。増分バックアッププランや差分バックアッププランを作成したい場合、フルバックアップイメージが必要です。フルバックアップで作成されるイメージのファイルサイズは、非常に「大きい」です。

増分 - 増分バックアップは、前回のバックアップの種類にかかわらず、それ以降に変更されたファイルだけをバックアップします。増分バックアッププランを鎖にたとえると、それぞれの増分バックアップは鎖を構成するのに個々の輪にあたります。もし、鎖の中の輪ひとつ(増分バックアップイメージひとつ)が破損すると、その破損したイメージを基準に作成される後続のバックアップイメージはすべて使えなくなります。前回のバックアップに基づき、変更されたファイルのみをバックアップするので、個々の増分バックアップイメージのファイルサイズは非常に「小さい」です。

差分 - 差分バックアップは、前回のフルバックアップまたは特定のフルバックアップイメージを基準に、変更されたファイルをバックアップします。個々の差分バックアップは、「基準となるフルバックアップイメージとの差分」なので、もし差分バックアップのうちひとつが削除されたり破損したとしても、他の差分バックアップには影響しません。差分バックアップイメージのファイルサイズは「中程度」です。

以下の3つの方法の中からバックアップの種類を選択することをおすすめします。

毎回フル - バックアップ対象のファイルの変更されている/いないに関係なく、毎回すべてのファイルをバックアップします。ごく限られた量のデータをバックアップしたいときや、複数のバックアップイメージを管理したくないときによい方法です。

フル&増分 - 増分バックアップでは前回のバックアップ以降に変更されたファイルだけをバックアップすればよいため、この方法は、他の方法より幅広く使われています。かなりの量のファイルを頻繁にバックアップしなくてはならないとき、「毎回フル」では時間が掛かりすぎます。「増分バック

アッププランを作成し、「一定期間ごとにフルバックアップをはさむ」という方法は、時間とディスク領域を確実に節約します。しかし、増分バックアップイメージを復元する際、基準となるフルバックアップイメージとそれ以降の増分バックアップイメージを作成された順序どおりにすべて復元していくので、時間がかかります。

フル&差分 - 上記2種類の間の方法といえます。個々の差分バックアップには、基準となるフルバックアップイメージとの差分のみが含まれるため、イメージの作成に必要な時間とディスク領域は「毎回フル」よりも少なくてすみませんが、「フル&増分」よりは多く必要です。差分バックアップイメージを復元する際は、「フル&増分」とは異なり、先に復元するのが基準となるフルバックアップイメージだけでいいため、短時間ですむことが長所です。(ここで説明している復元時の処理とは、本製品が自動的におこなっている処理です。実際にユーザーが必要な操作は差分バックアップイメージファイルの選択だけです。)

バックアップ対象の「合計ファイルサイズ」、「更新頻度」、バックアップ先の「ディスク空き領域」を考慮して、最適なバックアップ方法を選択することが重要です。

【ご注意】

バックアップ対象のファイルのほぼすべてが増分バックアップの開始前に変更されてしまっているような場合、増分バックアップイメージのファイルサイズが、フルバックアップイメージのファイルサイズと同じくらいのサイズになる可能性があります。バックアップ対象のファイルのほとんどが「前回のバックアップ時以降変更されている」「バックアップ周期中に確実に変更される」ということが明らかな場合、「毎回フル」を選択する方が、復元が簡単になります。

既存イメージのクリーンアップルール

頻繁におこなわれる長期のバックアッププランでは、すべてのバックアップイメージを保存していると、多くのディスク領域が取られてしまいます。そのため、古いバックアップイメージを定期的に削除し、ディスク領域を解放しなくてはいけなくなることがあります。手作業での削除で予期せぬトラブルを引き起こすことのないよう、本製品では、バックアップイメージの自動削除機能を2種類用意しています。

一定数だけ保持

1回のバックアップ操作の結果を1バックアップとします。それは、物理的にはひとつの単独ファイルのことであったり、バックアップイメージの分割を指定した場合にはファイルのセットのことであったりします。1バックアップを、バックアップされたデータのコピーひとつ分と考えることもできます。

残したいバックアップの数とスケジュールの指定後、本製品は一定の間隔でフルバックアップを自動作成します。以降、バックアップが作成される都度、それ以前のバックアップイメージを検出し、最近のバックアップ分がいくつ復元可能であることを確認します。設定数以上検出されると、古いバックアップイメージから削除して、設定数だけ残します。

この方法は、高頻度で実行する必要があるバックアップスケジュールに適しています。そういった状況では、古いバックアップを日数で管理するよりも、バージョンで管理する方が楽でしょう。

指定期間分だけ保持(過去×日分/週間分/ヶ月分/年分)

バックアップイメージを保持する日/週/月/年の数を指定します。すると、一定の間隔でフルバックアップイメージを作成し、指定期間を経過した古いバックアップイメージを削除するようになります。

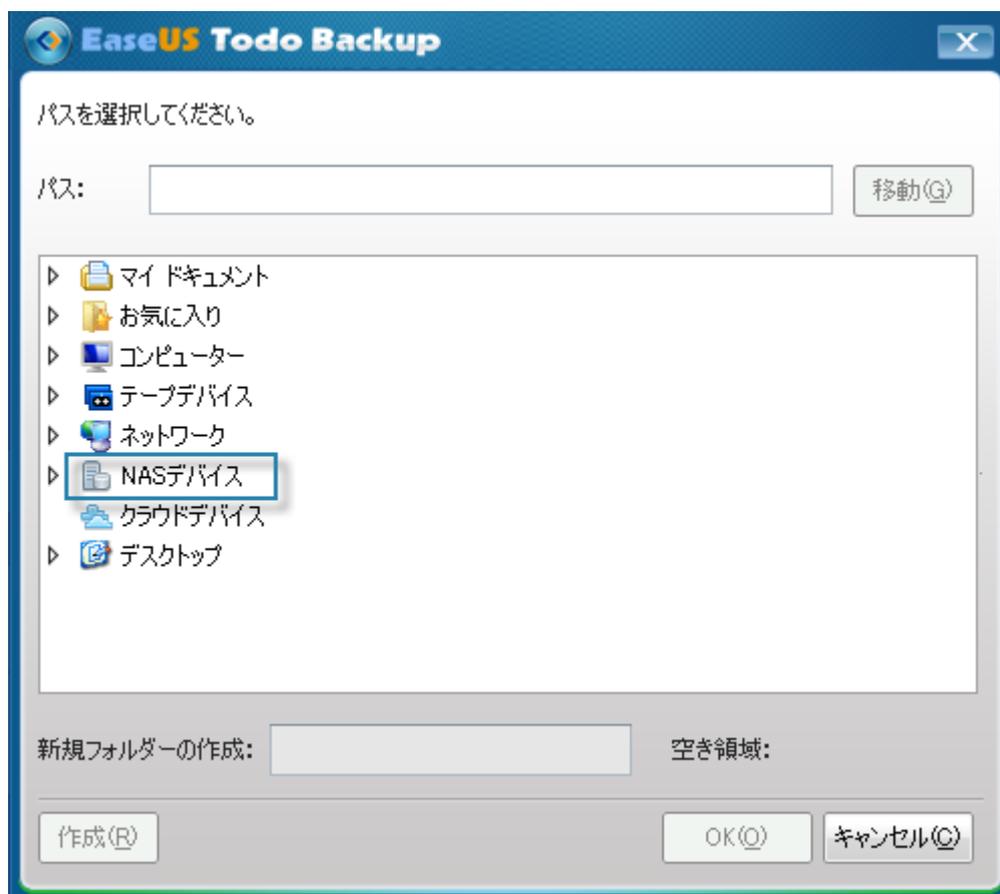
初回のバックアップイメージを残す

クリックすると、初回のオリジナルのバックアップを保持し続けます。上記の方法で指定した分より、バックアップがひとつ多く保持されることとなります。

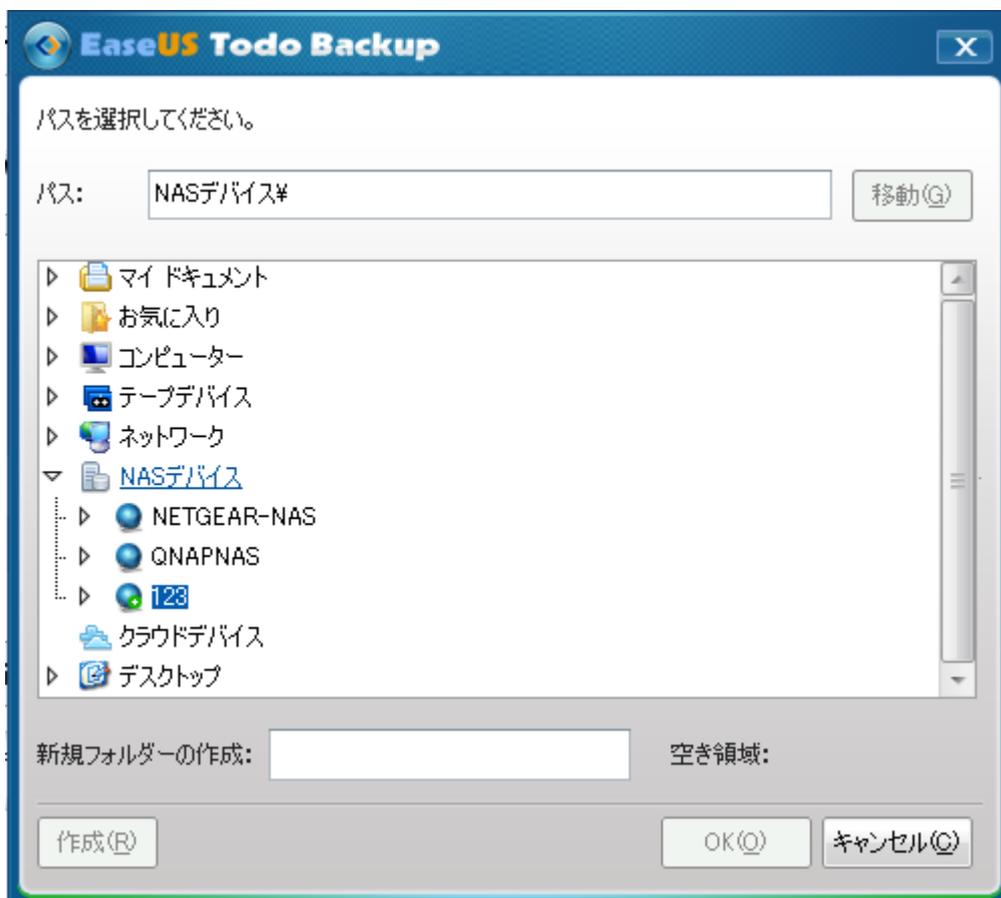
NAS管理

今日、データの保存に家庭でも企業でもNASが広く使われています。バックアップにもNASを便利に使えるよう、本製品にはNASデバイスの管理機能があります。

バックアップの作成や編集をするとき、バックアップ先を指定する欄の後ろにある  をクリックします。すると、下図のウィンドウが表示されます。



「NASデバイス」を右クリックして、[NASデバイスの追加] をクリックします。その後、NASデバイスの認証情報を入力します。



認証に成功すると、ツリーの「NASデバイス」の下に表示されます。右クリックすると、編集や削除をおこなえます。

復元

「復元」とは、バックアップを戻す処理のことです。バックアップイメージファイルに圧縮されたファイルを解凍し、バックアップイメージファイルの作成された時点の状態に戻します。この機能を使えば、ウイルス感染、システムクラッシュ、パーティション消失といった、さまざまな予期せぬコンピュータ災害から復旧できます。データロスが起きても、コンピューターが正常なときに作成したバックアップイメージファイルが残っている限り、復元を行うだけですべて簡単に取り戻せます。

システムの復元

「**システムバックアップ**」で作成したバックアップイメージファイルでシステムを復元します。最も効率のよいシステム復元方法で、作業は2ステップで完了します。

1. **【ホーム】** タブの「**システムの復元**」をクリックします。以前作成したシステムバックアップイメージのパスが自動参照されます。使用するバックアップイメージを選択し、**【次へ】** をクリックします。

2. 復元先のハードディスクを選択後、**【進む】** をクリックして操作を実行します。

復元先のディスクがSSDの場合、「**SSD用に最適化**」にチェックを入れておくと、処理中にセクターアライメントがおこなわれ、復元先のSSDからのブートに成功する可能性が高まります。

ほとんどの場合、他のオプションをチェックする必要はありません。詳しくは、**「セクタバイセクタ方式復元」** の章をご参照ください。

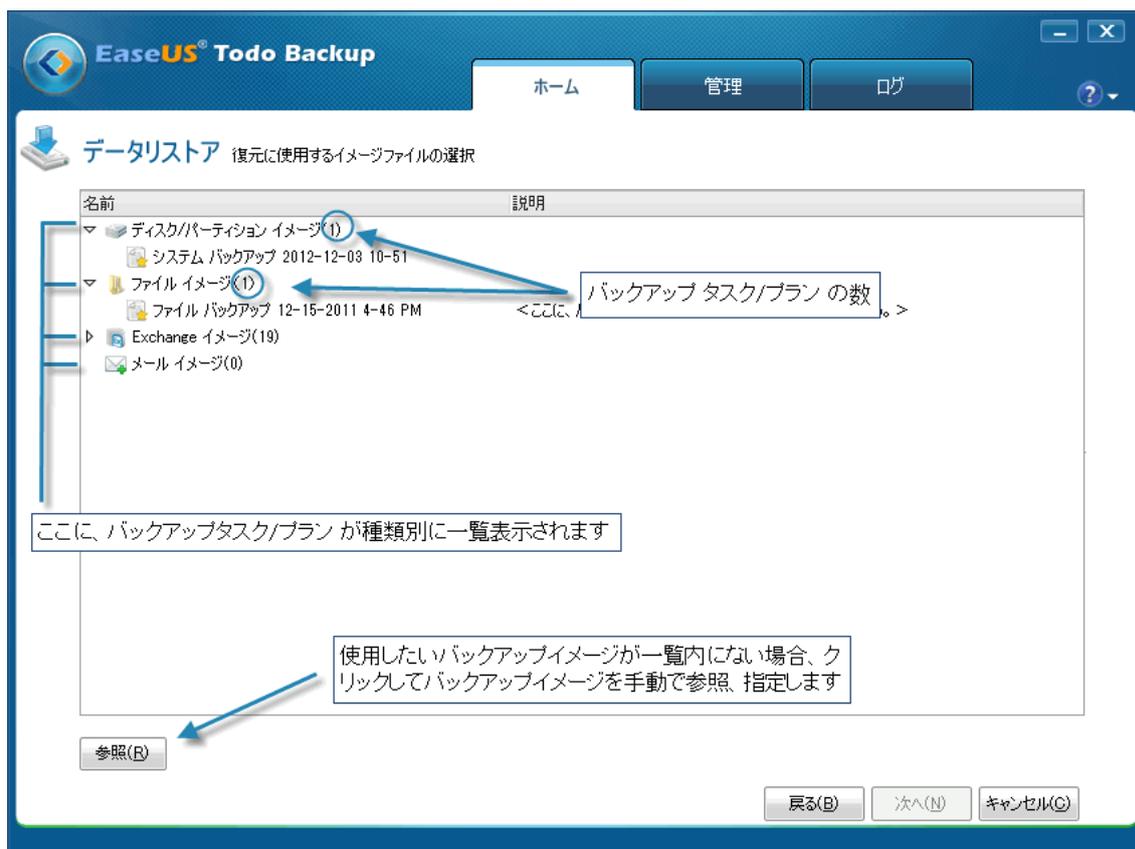
【ご注意】

バックアップイメージの作成以降に、バックアップ元のシステムパーティションのサイズや場所が変更されている場合、システムの復元を実行しようとするときに、他のハードディスクを復元先にするかわずねられます。

ディスク/パーティションの復元

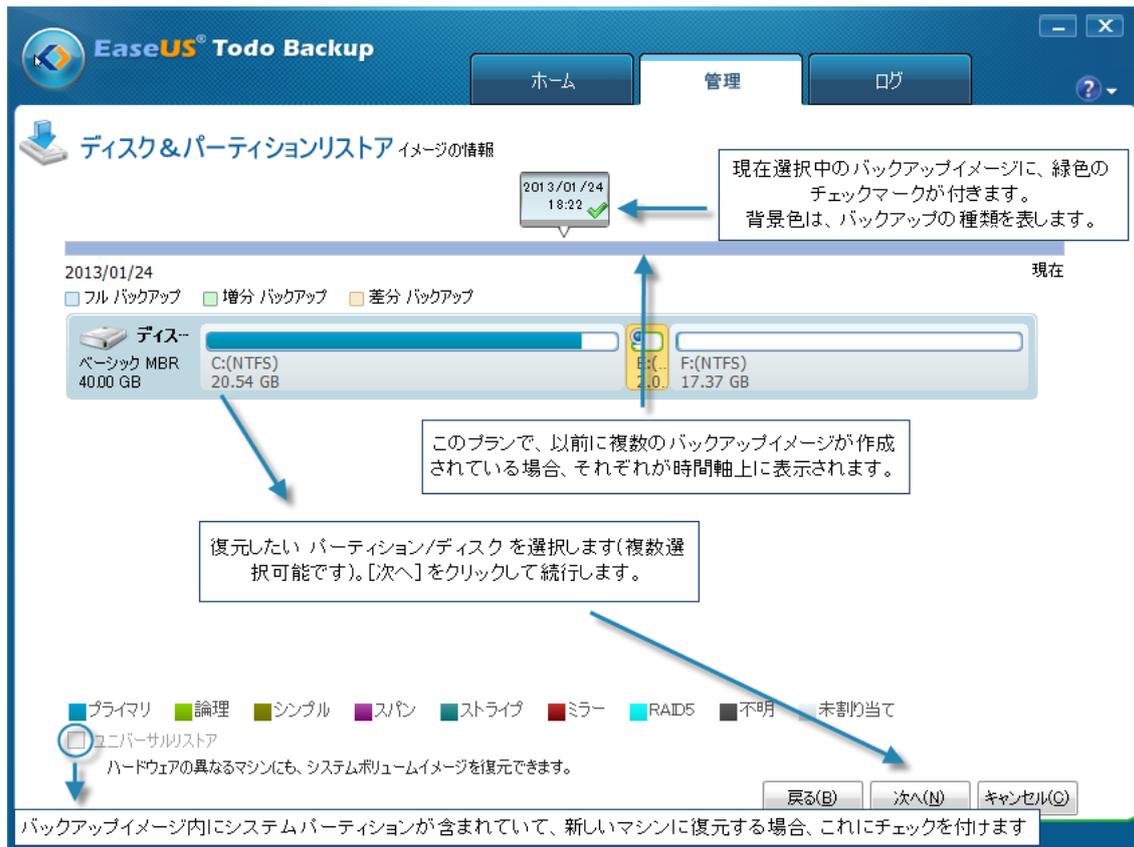
ディスクバックアップやパーティションバックアップで作成したバックアップイメージファイルから、OSのパーティションやデータ用パーティションを復元するのに使用します。

1. 【ホーム】 タブの「**データ復元**」をクリックしてウィザードを開始します。
2. 説明欄などを見て、どのバックアップを使用して復元を実行するか選択します。目的のタスクが一覧にない場合、【参照】をクリックしてバックアップイメージの場所を指定します。



3. すべてのバックアップイメージファイルが時間軸上に表示されます。どの時点に復元するか区別するには、**バックアップの種類**や**作成日時**などを見るとよいでしょう。

復元するイメージを決定したら、どのパーティション/ハードディスクを復元するか決定します。バックアップ対象の中から一部だけを復元(例： ディスクイメージファイルの中から1パーティション分のみ復元)したいという場合、必ずしもすべての内容を選択する必要はありません。



4. 復元先のディスク/パーティションを選択します。



「**セクタバイセクタ方式復元**」にチェックを入れると、セクタバイセクタ方式での復元処理がおこなわれます。セクタバイセクタ方式の場合、復元先のパーティションのサイズ変更の操作はできません。詳しくは、[「セクタバイセクタ方式復元」](#)の章をご参照ください。

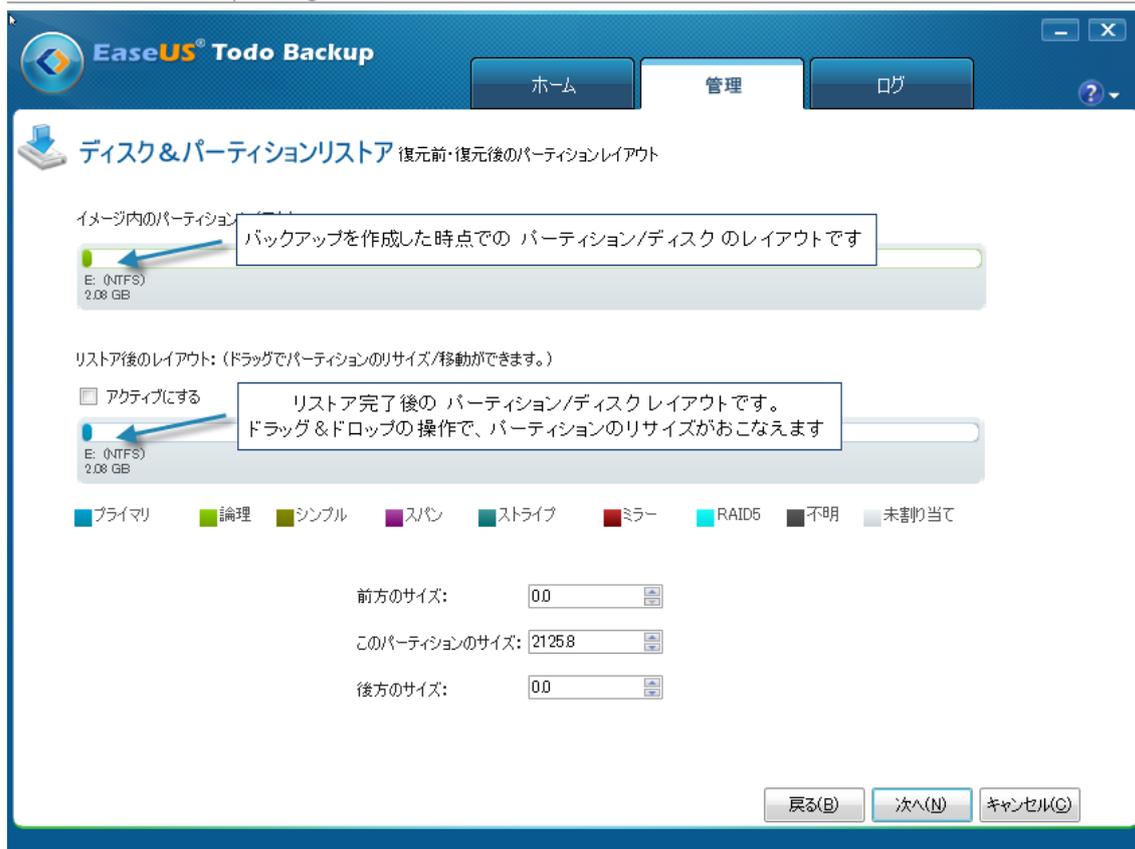
このステップでは、復元先のディスク/パーティションの容量は、バックアップ元のディスク/パーティションの容量と同じか、それ以上である必要があります。

復元先のディスクがSSDの場合、「**SSD用に最適化**」にチェックを入れておくと、処理中にセクタアライメントがおこなわれ、復元先のSSDからのブートに成功する可能性が高まります。

【ご注意】

復元先のディスク/パーティション全体が上書きされます。データの存在するディスク/パーティションを復元先にすると、そのデータは永久に失われます。復元先はくれぐれも慎重に指定してください。

5. 復元後のディスク/パーティションのレイアウトがどのようになるか、プレビューで確認できます。復元先のディスクに十分な空き領域がある場合、パーティションの移動、サイズ変更、アクティブ指定がおこなえます。「**セクタバイセクタ方式復元**」のオプションが使用されている場合、復元先のパーティションのサイズ変更の操作はおこなえません。



6. 復元の詳細が正しく設定されていることを確認し、復元を実行するなら **【進む】** をクリック、設定値を修正するなら **【戻る】** をクリックします。

復元先のディスク/パーティション上で開かれているファイルや実行中のアプリケーションがある場合、本製品はコンピューターの再起動を要請し、復元の処理を再起動後の「PreOSモード」で実行します。

ダイナミックボリュームの復元

ダイナミックボリュームの復元は、ベーシックパーティションの復元と同様です。ただし、ダイナミックボリュームの復元では、復元先に使用できるのは既存のダイナミックボリュームのみですのでご注意ください。

「**ディスク&パーティション復元**」をクリックし、以降はウィザードにしたがって復元を完了します。ウィザードの詳細につきましては、[「ディスク&パーティション復元」](#)の章をご参照ください。

バックアップ元のボリュームにOSがインストールされていた場合、ベーシックディスクへの復元後、そのボリュームはプライマリパーティションになります。それ以外のボリュームは、論理パーティションになります。

セクタバイセクタ方式の復元

このオプションを有効にすると、イメージファイルの内容を**セクタバイセクタ方式**で復元します。元のパーティションやハードディスクに何らかの論理エラーがある場合でも、このオプションなら復元処理を正常に完了できるでしょう。また、復元後に各ファイルを元のセクター位置に配置させたいという場合にも、このオプションが役立ちます。しかし、このオプションを有効にすると、その後のステップで書き込み先パーティションのリサイズができなくなります。

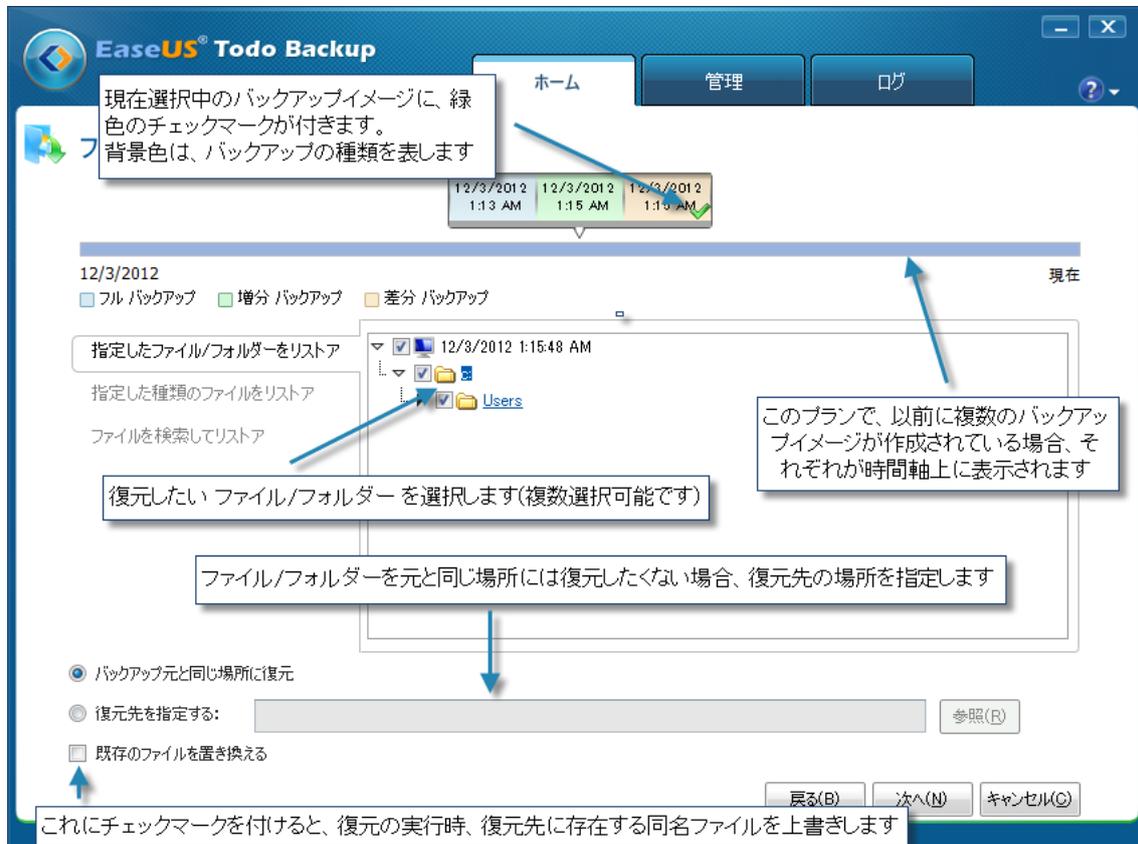
ファイルの復元

以下の手順でファイルやフォルダーを復元します：

1. **【ホーム】** タブの「**データ復元**」をクリックしてウィザードを開始します。
2. 説明欄などを見て、どのバックアップを使用して復元を実行するか選択します。目的のタスクが一覧にない場合、**【参照】** をクリックしてバックアップイメージの場所を指定します。



3.どの時点に復元するか区別するには、バックアップの種類や作成日時などを見るとよいでしょう。



4. どのファイル/フォルダーを復元するか選択します。以下の3種類の方法があります。

指定したファイル/フォルダーを復元 - ファイル/フォルダーを手動で選択すると、選択したファイル/フォルダーのみが復元されます。

指定した種類のファイルを復元 - どのファイルを復元するか、ファイルの種類(拡張子)で指定します。

ファイルを検索して復元 - どのファイルを復元するか、ファイル名で検索して選択します。

5. 復元先のフォルダーを選択します。

バックアップ元と同じ場所に復元 - ファイル/フォルダーがバックアップ以前と同じ場所に復元されます。

復元先を指定する - 選択したファイル/フォルダーが指定したフォルダーに復元されます。

既存のファイルを置き換える - バックアップ元と同じ場所にファイルを復元しようとする時、当然復元先のパスには同名のファイルが存在しています。このオプションにチェックマークを付けると、復元の実行時、復元先に存在する同名ファイルは上書きされます。このオプションは、ファイル復元ウィザードで、復元先を選択するときに表示されます。

6. 復元の詳細が正しく設定されていることを確認し、復元を実行するなら **【進む】** をクリック、設定値を修正するなら **【戻る】** をクリックします。

Outlookの復元

以下の手順でメールボックス/フォルダー/メールを復元します：

1. **【ホーム】** タブの **「データ復元」** をクリックしてウィザードを開始します。
2. 説明欄などを見て、どのバックアップを使用して復元を実行するか選択します。目的のタスクが一覧内にない場合、 **【参照】** をクリックしてバックアップイメージの場所を指定します。



3. どの時点で復元するか区別するには、バックアップの種類や作成日時などを見るとよいでしょう。



4. どのメールボックス/フォルダー/ファイルを復元するか選択します。この処理で既存のメールや連絡先が置き換えられてしまうことはありません。

5. 復元先のフォルダーを選択します。

6. 復元の詳細が正しく設定されていることを確認し、復元を実行するなら **【進む】** をクリック、設定値を修正するなら **【戻る】** をクリックします。

ユニバーサルリストア

この機能は、プライマリパーティションにインストールされたOSを復元するときのみ利用可能です。ハードウェア構成の異なる別のコンピューターにシステムパーティションを復元したい場合、このオプションを有効にすると、本製品が復元先のコンピューター上でドライバーの検出とインストールの処理をおこなうため、復元処理後のコンピューターが通常どおり動作します。この操作には2つの方法があります。

完全な操作

1. **【ホーム】** タブの **「データ復元」** をクリックします。
2. **【参照】** をクリックして、OSのバックアップイメージファイルを指定後、**【次へ】** をクリックします。
3. 最初に、復元したいOSのシステムパーティションとブートパーティションを選択します。次に、左下部の **「ユニバーサルリストア」** をチェックします。**【次へ】** をクリックします。
4. OSの復元先を指定します。**【次へ】** をクリックすると、コンピューターを再起動するかたずねられます。ユニバーサルリストアは、PreOSモードまたはWinPEブータブルディスクでのみ行えます。

5. ユニバーサルリストアの処理中に新しいハードウェアが検出された場合、ポップアップウィンドウが表示され、ドライバーを手動で読み込む必要があります。フォルダーを指定してドライバーのインストールをおこなってください。検出されたハードウェアがコンピューターのブートには必要ないことが明らかな場合、**【スキップ】** をクリックしてポップアップウィンドウを無視することもできます。
6. 必要なドライバーの追加後、BIOS設定のブートシーケンスを十分確認してから、書き込み先のハードディスクからのブートを試行してください。

クイック操作

【ホーム】 タブの「**ユニバーサルリストア**」をクリックします。

1. 復元したいシステムイメージを選択します。 **「システムバックアップ」** の機能を使用して以前にシステムイメージを作成したことがある場合、自動的に選択されています。
2. 復元先を指定します。 **【進む】** をクリックし、操作を実行します。

復元先のディスクがSSDの場合、**「SSD用に最適化」** にチェックを入れておくと、処理中にセクターアライメントがおこなわれ、復元先のSSDからのブートに成功する可能性が高まります。

ほとんどの場合、他のオプションをチェックする必要はありません。詳しくは、**「セクタバイセクタ方式復元」** の章をご参照ください。

体験版プログラムをお使いの場合は、WinPEブータブルディスクをご自身で作成し、この機能をご使用ください。

クローン

選択したハードディスクまたはパーティションの複製を作成します。バックアップの操作後はイメージファイルができあがるのに対し、クローンの操作後は複製元と同一の内容のハードディスクやパーティションができあがるという違いがあります。クローンで作成されたディスクやパーティションは、直接使用することができます。

ディスククローン

ディスククローン では、1台のハードディスクから別のハードディスクへ、OSやインストール済みのプログラムなども含めすべてのデータを転送します。環境そのままに、ディスクだけを新しいものと置き換えたいというときに役立ちます。クローン処理を成功させるため、書き込み先のハードディスクの容量が、読み込み元のハードディスクの使用済み領域と同じかそれ以上であることを確認してください。

1. **【ホーム】** タブの「クローン」をクリックします。
2. **【クローン元】** でクローンされたい磁気ディスクを選ぶ。
3. **【目標位置】** で磁気ディスクを選んで **【次へ】** ボタンを押す。このステップのオプションの詳細につきましては **「セクタバイセクタ方式クローン」** の章をご参照ください。

書き込み先のディスクがSSDの場合、**「SSD用に最適化」** にチェックを入れておくと、処理中にセクタアライメントがおこなわれ、書き込み先のSSDからのブートに成功する可能性が高まります。

【ご注意】

クローン処理の開始後、書き込み先のディスク全体が上書きされ、データはすべて失われます。

4. クローン処理後のディスクのレイアウトがどのようになるか、プレビューで十分確認します。書

書き込み先のディスクに十分な未割り当て領域がある場合、ディスクレイアウトの変更がおこなえます。

セクタバイセクタ方式の場合、パーティションのサイズ変更の操作はおこなえません。

5. **【進む】** をクリックし、操作を実行します。

クローン処理の開始準備時、書き込み先のハードディスクが他のアプリケーションにロックされている場合や、書き込み先ハードディスク内に開かれているファイルや実行中のアプリケーションがある場合、本製品はコンピューターの再起動を要請し、クローン処理を再起動後の「プリOSモード」で実行します。

パーティションクローン

クローンしたいパーティションを選択します。まず、書き込み先パーティションの容量が読み込み元パーティションと同じかそれ以上であることを確認してください。

1. **【ホーム】** タブの「クローン」をクリックします。
2. **【クローン元】** でクローンしたいバージョンを選ぶ。一度にクローンできるのは1パーティションのみです。
3. **【目標位置】** で磁気ディスクを選んで **【次へ】** ボタンを押す。このステップの操作の詳細については「[セクタバイセクタ方式クローン](#)」の章をご参照ください。

書き込み先ディスクがSSDの場合、「**SSD用に最適化**」にチェックを入れておくと、処理中にセクタアライメントがおこなわれ、書き込み先のSSDからのブートに成功する可能性が高まります。

【ご注意】

クローン処理の開始後、書き込み先パーティション全体が上書きされ、データはすべて失われます。

4. クローン後の書き込み先パーティションのディスク内の物理的場所と容量を決定します。このパーティションに隣接している空き領域がある場合、マウスのドラッグ操作でパーティションの移動や

サイズ変更をおこなうことができます。

別のハードディスク上に作成したクローンのパーティションからブートしたい場合、「**アクティブにする**」のオプションを有効にすると作業が容易になります。

セクタバイセクタ方式の場合、パーティションのサイズは変更できません。

5. **【進む】** をクリックして、パーティションクローンを実行します。

ダイナミックディスク/ボリュームのクローン

「**ディスククローン**」の機能を使うと、コンピューター上のダイナミックボリュームを他のベーシックディスクへクローンできます。ダイナミックボリュームは実際には複数のダイナミックディスク上に存在するボリュームですが、一覧では、すべてのダイナミックボリュームはひとつのシングルダイナミックディスクとして表示されます。

個別のダイナミックボリュームを、ベーシックディスクまたは既存のダイナミックボリュームにクローンすることができます。この操作は「**パーティションクローン**」で実行できます。

セクタバイセクタ方式のクローン

「セクタバイセクタ方式クローン」において、クローン先のハードディスク/パーティションはクローン元の正確な複製になります。このオプションにチェックマークが付けてあると、クローン元のセクターを、たとえ未使用のセクターであってもすべて複製します。その結果、クローン処理の後、クローン先はクローン元と同じサイズになります。このオプションはディスククローンとパーティションクローンのウィザードで、クローン先を選択するときに表示されます。

Advanced Serverエディション専用ツール

現在、サーバー管理者が各種ツール(電子メールの管理にMicrosoft Exchange、リレーショナルデータベースのクエリ・アップデートにMicrosoft SQLなど)を活用して、業務データを管理しています。企業で行う日々の業務にとって、データは大変重要です。データの物理的セキュリティ、完全性、安全性を維持する責任をサーバー管理者が一身に背負っている場合もあります。そういったデータの定期的なバックアップを習慣化することは大切です。単に特定の時点でのデータの状態を保存するだけでなく、予期せぬシステム障害に直面したときに役立つことにもなります。

EaseUS Todo Backup Advanced Serverエディション および **Technicianエディション**では、Microsoft Exchange ServerやSQL Serverのデータを簡単にバックアップすることができます。また、より優れた管理と保存のために、テープデバイスへデータをバックアップすることもできます。

Exchange Serverのバックアップ

Microsoft Exchangeのインストールされた物理/仮想サーバーがExchange Serverです。ExchangeはMicrosoftサーバー製品群の一部で、電子メール・カレンダー・連絡先・タスクなどの主要な機能からなります。モバイル/ウェブベースでの情報へのアクセス、データストレージのサポートに対応しています。本製品では、バックアップの基本単位としてデータストレージを選択できます。

EaseUS Todo Backupは、Exchange 2003、2007および2010に対応しています。

Exchangeバックアップで作成したタスクやスケジュールはすべて「**管理**」タブに一覧表示され、Exchangeバックアップタスクの内容を編集したり、更新したりできます。

Exchangeのバックアップ

Exchange バックアップタスク/プランを作成するには、**【ホーム】** タブの「**データバックアップ**」

をクリックして、次に **【Exchange Server】** タブに切り替えます。バックアップタスクを開始する前に、Exchange Serverがマウントされていることを確認してください。

1. タスク/プラン名と説明を入力します。どんな内容のバックアップなのか後でわかりやすいタスク名にしたり、説明欄を適宜利用すると、実際にデータを復元する際、大いに役立つでしょう。



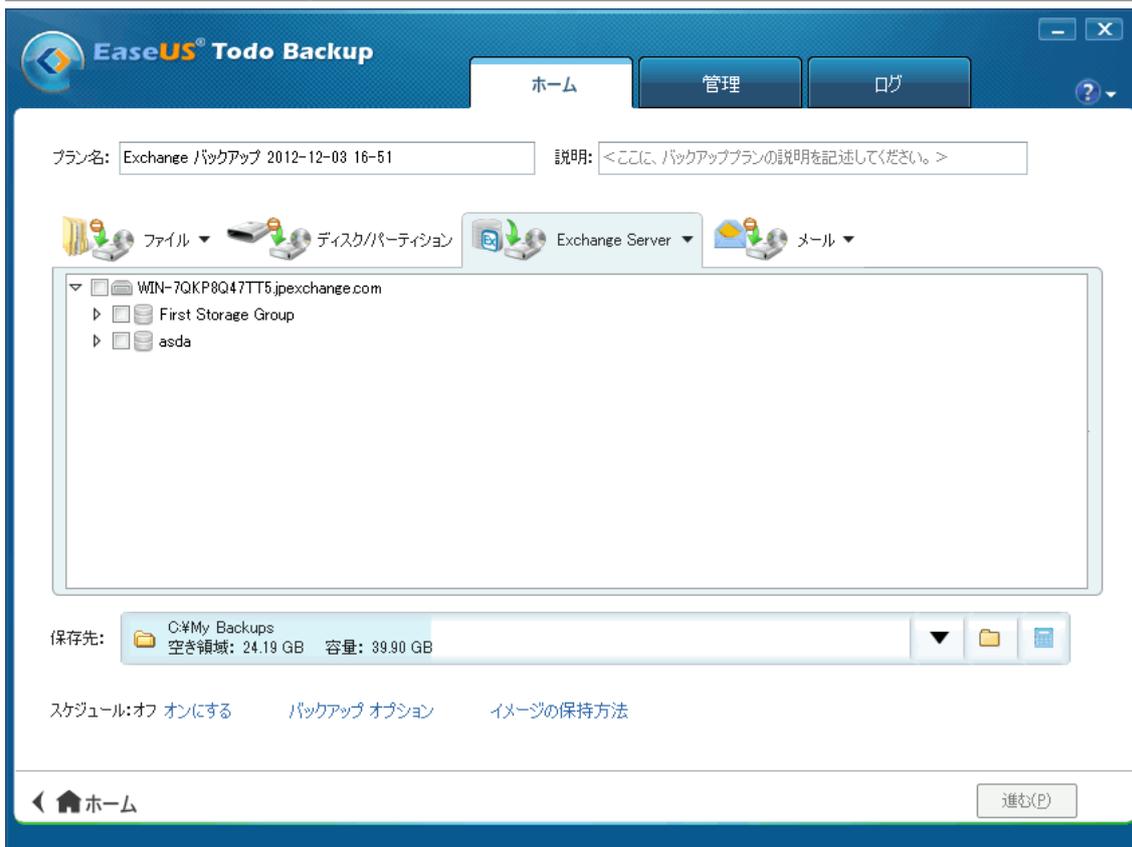
「バックアップオプション」をクリックすると、高度な設定値の調整をおこなえます。詳しくは、「バックアップオプション」の章をご参照ください。

「オンにする」をクリックすると、バックアップをスケジュール実行するよう指定できます。詳しくは、「スケジュールバックアップ」の章をご参照ください。

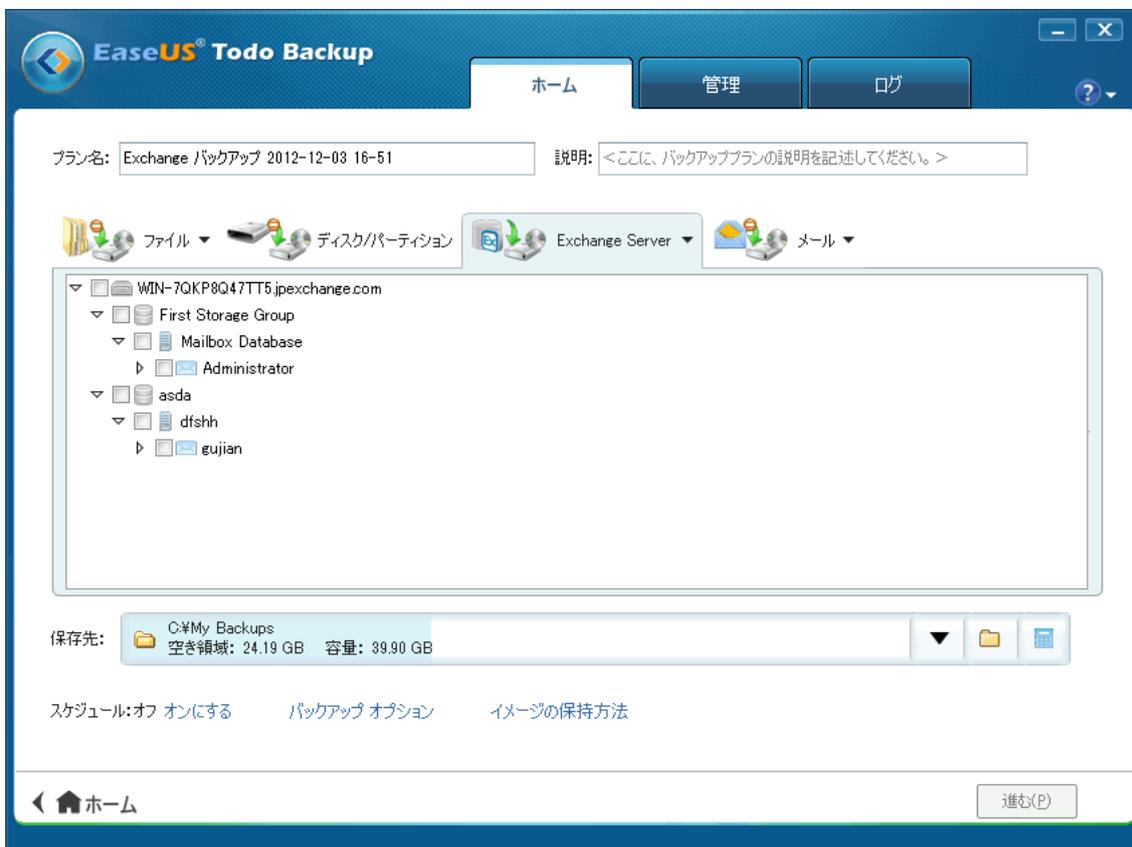
「イメージの保管方法」をクリックすると、イメージのクリーンアップルールを構成し、イメージファイルの管理を自動化できます。

2. バックアップ元を選択します。Exchangeのバックアップには2つの方法があります。

(1) ストレージグループモード



(2) メールボックスモード



3. イメージファイルの保存先を決定します。ローカルディスク、ネットワークフォルダー、テープドライブを使用でき、下向き三角形(▼)をクリックすると、バックアップ先の履歴が表示されます。



「NASデバイス」を右クリックすると、NASデバイスを追加できます。詳しくは、[「NAS管理」](#)の章をご参照ください。

4. 設定が完了したら、**【進む】** をクリックします。終了するには、**【ホーム】** をクリックします。

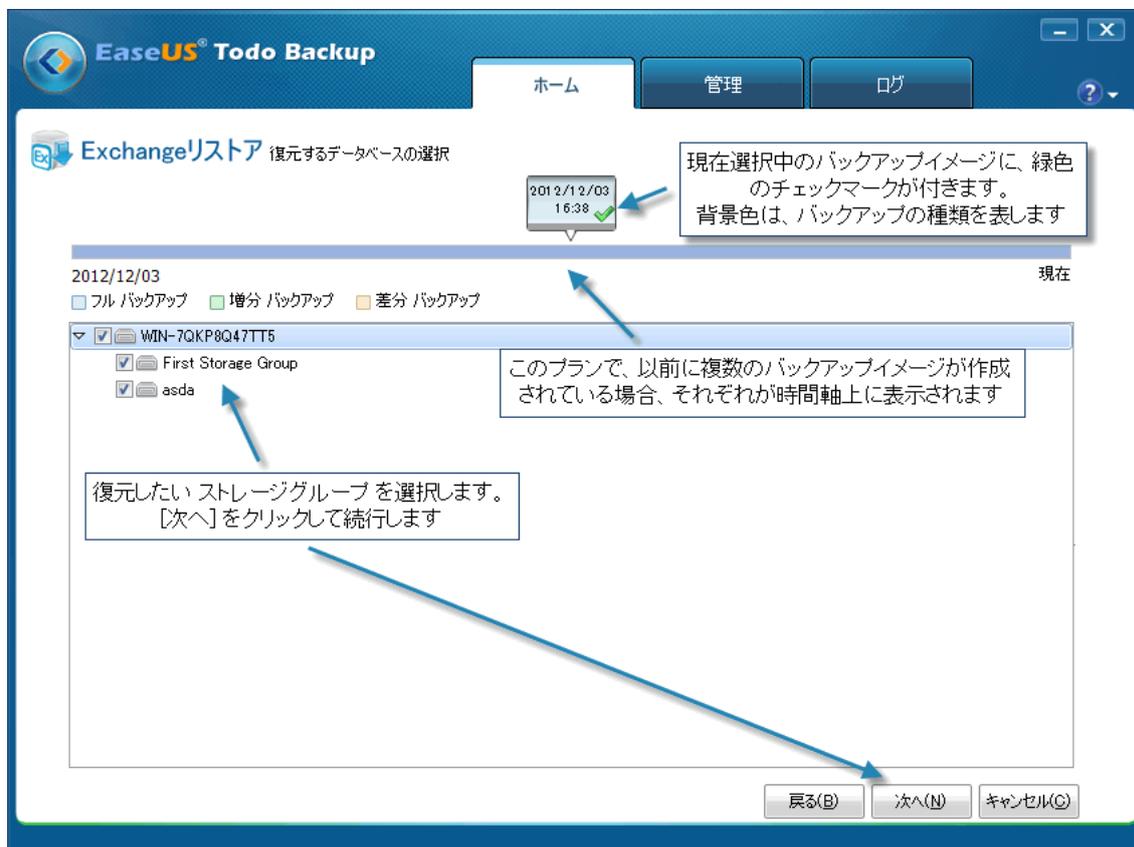
Exchange の復元

Exchangeバックアップを戻す操作です。この機能を使うと、Exchangeのストレージグループを復元できます。

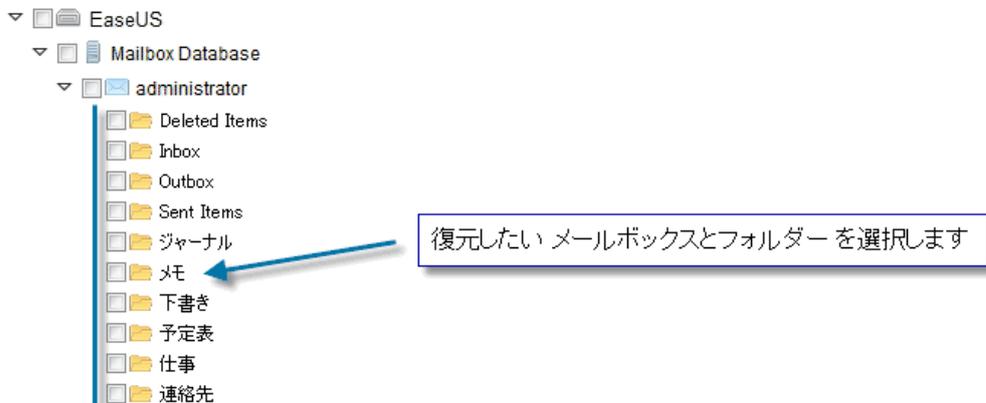
1. **【ホーム】** タブの「**データ復元**」をクリックしてウィザードを開始します。
2. 説明欄などを見て、どのバックアップを使用して復元を実行するか選択します。目的のタスクが一覧にない場合、**【参照】** をクリックしてバックアップイメージの場所を指定します。



3.どの時点で復元するか区別するには、**バックアップの種類**や**作成日時**などを見るとよいでしょう。



4. どのストレージグループ/メールボックスを復元するか決定します。バックアップ対象の中から一部だけを復元したいという場合、必ずしもすべての内容を選択する必要はありません。



5. 復元の詳細が正しく設定されていることを確認し、復元を実行するなら **【進む】** をクリック、復元をやめるなら **【キャンセル】** をクリック、設定値を修正するなら **【戻る】** をクリックします。

本製品では、ストレージグループを元の場所に自動的に復元するようになっていますので、復元先を指定する必要はありません。

【ご注意】

メールボックスの復元を実行するとき、既存のメールは上書きされません。

Exchange Serverデータベースを新しいマシンに復元するには、Exchange Server名がバックアップ時と同じであることを確認する必要があります。

MS SQL Serverのバックアップ

SQLは、リレーショナルデータベース管理システムでのデータ管理用に設計された構造化クエリ言語です。Microsoft社の **Microsoft SQL Server**の主要な機能には、データの挿入(Insert)、問い合わせ(Query)、更新(Update)、削除>Delete)、スキーマの作成・修正、データアクセスコントロールの機能があります。EaseUS Todo Backup は、SQL Server 2000/2005/2008に対応しています。

MS SQLバックアップイメージファイルの拡張子は、**.bak** です。

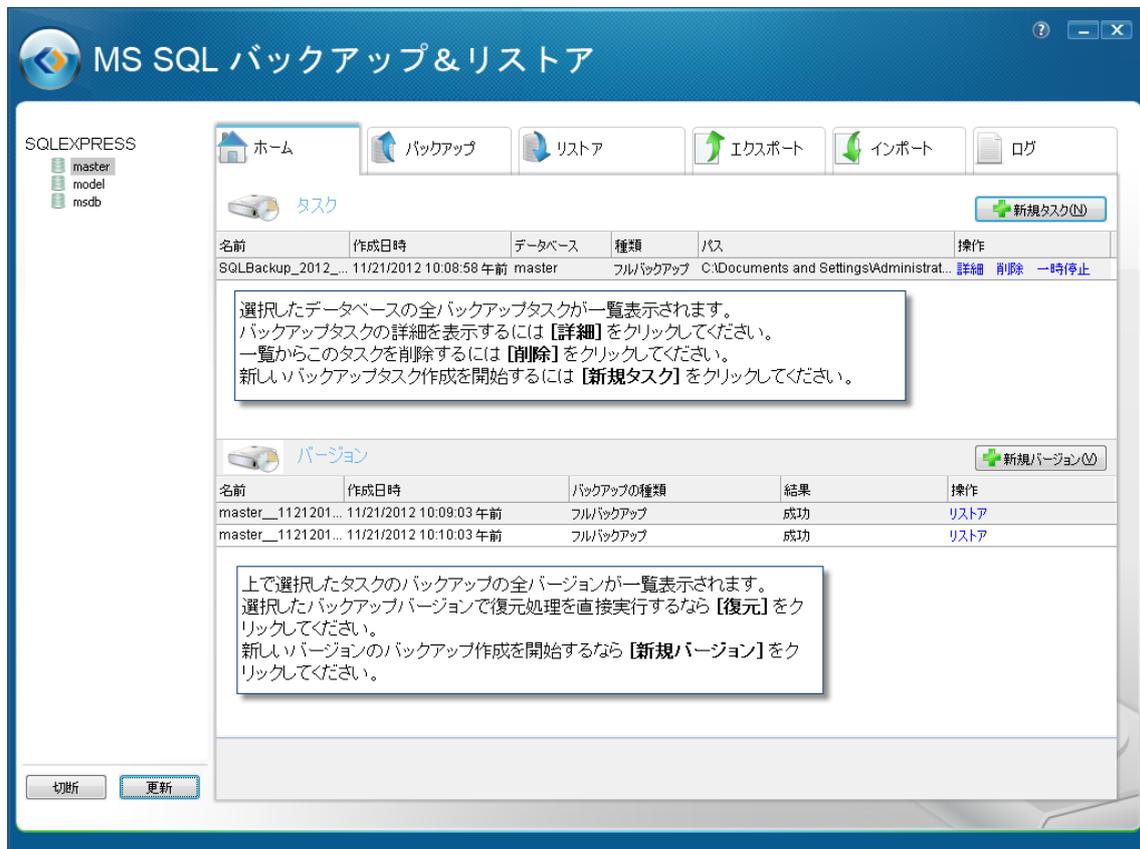
ユーザーログイン

【ホーム】タブの「SQL バックアップ」をクリックすると、SQLバックアップツールが起動します。認証用のウィンドウがポップアップ表示されるので、管理者権限のあるWindowsユーザーまたはSQL Serverアカウントを入力し、認証してください。なお、このステップでログインするインスタンスの選択を忘れないよう、注意してください。

ホーム

MS SQLバックアップツールが起動されると、下図の画面が表示されます。【管理】タブが、SQLバックアップ専用で独立したものだとお考えください。ここでは、ログインインスタンス内のすべてのバックアップについて、検証や管理をおこなうことができます。

このページで利用可能なボタンやオプションについて説明します。



左側のパネルに、全データベースが一覧表示されます。項目を選択後、必要な操作をおこないます。

左下部の【**切断**】をクリックすると、インスタンスを切断し、ログインウィンドウに戻ります。【**更新**】をクリックすると、インスタンスの最近の変更内容を更新します。

バックアップ

通常のバックアップや Exchangeバックアップでのウィザードとは違い、SQLデータベースのバックアップに関連するパラメーターの設定は、〔バックアップ〕タブから1ステップでおこないます。新規のタスクまたはプランを作成する必要がある場合、まず、左側のデータベース一覧からデータベースを選択し、次に、以下の項目の設定をおこなってください。

基本情報

タスク名 - 現在編集中のタスクの名前を指定します。

保存先 - イメージファイルの保存先を決定します。バックアップ先として、ハードディスクだけでなくテープデバイスも選択できます。(テープへのバックアップ時にも、一時データの転送用に一定量のハードディスク空き領域が必要です。)

エラー時に続行する - 処理中にメディアエラーが発生した場合、無視するかどうかを指定します。

プラン

このセクションのオプションは、スケジュールを「オン」にしたときのみ有効です。それ以外ではすべての設定は灰色で表示され、変更することはできません。バックアップの時間指定は「日」「週」「月」ベースでおこなえます。

次に、使用するバックアップモードを決定する必要があります。

フル - すべてのデータベースとトランザクションログを常にバックアップします。

差分 - 前回のフルバックアップ以降に変更されたファイルのみバックアップします。トランザクシ

ンログも含まれます。

トランザクションログ - トランザクションログのみをバックアップします。

オプション

圧縮 - イメージファイルを圧縮するか指定します。(MS SQL 2008 Enterpriseまたはそれ以降のバージョンのみ対応)

通知 - このバックアッププランの結果を、指定あらかじめ指定した電子メールアドレス宛に送信します。設定方法の詳細は [【Eメール通知】](#) の章をご参照ください。

復元モード

現在編集集中のタスクの復元モードを指定します。

シンプル - ログのバックアップはおこないません。ディスク空き領域が小さくて済むよう、ログの領域を自動回復します。トランザクションログ領域の管理が不要になります。シンプルモードログのバックアップはしたくなく、復元に関してはフルバックアップのみを信頼するという方に適しています。

フル - ログバックアップが必須です。データファイルの消失や破損により失われる作業はありません。このフルモードではすべてが記録され、個々のトランザクションの復元が可能です。

一括ログ - ログバックアップが必須です。フルモードの補助的方法で、高パフォーマンスの一括コピー操作が可能です。ほとんどの操作に最小ロギングを使用することで、ログの使用領域を減らします。

復元

MS SQL イメージファイルを復元するには、以下の手順でおこなってください。

1. **【復元】** タブに切り替えます。
2. 左側のパネルの一覧から、バックアップイメージの作成元のデータベースを選択します。

3. イメージファイルがテープ内にある場合は、復元するイメージを指定し、「テープドライブ」を選択する必要があります。その後、リストからテープを選択します。
4. **復元の種類選択**の欄では、イメージファイル内のデータベースを、既存のデータベースへ復元することができます。この操作では書き込み先のデータベースが上書きされます。また、データベース名と場所を指定して、新規データベースへ復元することもできます。
5. 「エラー時に続行する」を有効にすると、処理中にメディアのエラーが発生した場合にすべて自動的にスキップされます。
6. **【処理】** をクリックして、操作を実行します。

1. エクスポート/インポート

エクスポート

データベースを選択し、MDFファイルとしてエクスポートすると、さらなる用途に活用できます。別インスタンスやSQL Serverに転送、トランザクションログをLDFファイルとしてエクスポート、といったことができます。次の手順で操作してください。

1. 左側のパネルの一覧から、データベースを選択します。
2. MDFファイルの出力先を指定します。
3. **【処理】** をクリックして操作を実行します。

インポート

データファイル欄の後ろの **【参照】** をクリックして、MDFファイルをインポートします。トランザクションログファイルのインポートもオプション選択できます。元のインスタンスのデータベースの操作記録が必要ない場合、ログファイル欄の後ろの **【参照】** は無視してください。

既存のデータベースへのインポートを指定し、上書することもできます。また、新規データベース

を作成しMDFファイルをインポートすることもできます。

ログ

本製品でおこなった操作はすべてログファイルに記録され、このページに一覧表示されます。タスクが成功したかどうか、バックアップがいつ作成されたか、バックアップの種類は何かなど、各タスクの詳細情報を見ることができます。

特定のタスクの詳細を表示したい場合、**キーワード**や実施日時などで条件指定して検索することができます。条件に一致するタスクのみが一覧表示されます。

ログをクリアすると、ログファイルのすべての情報が削除されますので、**【クリア】** ボタンをクリックするときには細心の注意を払ってください。

テープデバイスへのバックアップ

テープドライブは、テープドライバーと物理磁気テープで構成されています。管理者はテープドライバーを介して磁気テープのデータの読み書きをおこなえます。この種の記憶装置は、オフラインの保管用データストレージに使用されます。テープメディアは一般に、コスト面と長期保管の安定性において、他の記憶媒体より優れているといわれています。

PBDイメージファイルをテープに保存する

本製品で生成されたイメージファイルの拡張子はデフォルトでは「PBD」です。標準バックアップタスクや Exchangeバックアップタスクでのイメージファイルは、どちらもこの拡張子が付いています。イメージファイルをテープに保存するには、バックアップ先の選択時にテープデバイスを選択してください。本製品でPBDイメージファイルを保存する際、一時データ転送のためローカルハードディスク上に2GB以上の空き領域が必要です。

BAKイメージファイルをテープに保存する

SQLバックアップで生成されるイメージファイルの拡張子は「BAK」です。BAKファイルについては、SQLバックアップツールの「バックアップ」タブで、保存先をテープデバイスへ切り替え、イメージファイルをテープデバイスへ書き込むことができます。本製品は、SQLバックアップと通常のバックアップで異なるアルゴリズムを使用しているため、一時データ転送のために必要なローカルハードディスク上の空き領域は、作成されるBAKファイルのサイズと同程度になります。

テープデバイスからBAKファイルを復元する際は、**【復元】**タブ内のラジオボタンで「テープドライブ」を選択します。

【ご注意】

差分バックアップイメージをテープに保存することはできません。

データがすでに存在するテープを選択した場合、処理中に「データを上書きする」か「別の空のテープを挿入する」かの確認がおこなわれます。

ひとつのプランにつき、新しいテープ上に自動でフルバックアップイメージが作成されます。

本製品では、オートローディングのテープドライブの自動テープ交換には対応していません。

スナップショット

スナップショット とは、ある特定の時点におけるシステムの状態のことをいいます。この機能は、新しいデプロイメントのテストに使用できます。何か不具合が起きたときに、「スナップショットを取った時点までコンピューターをロールバックする」ということが可能です。スナップショット機能は、バックアップ/復元/ディザスターリカバリーの処理の簡略化のために作成されました。

この機能は**Home**エディションと**Workstation**エディションでのみ利用可能です。

スナップショットの利点

スナップショットとはシステムバックアップの代替手段のひとつです。必要な空き領域が少なく済み、復元の速度が非常に速いという利点があります。尚、スナップショットファイルを含むディスクはバックアップできません。

しかし、スナップショットは手軽である一面、システムがあまりに変更されてしまうと利用できなくなるため、長期のデータ保護には、スナップショットよりもバックアップの方が安定で適していると言えるでしょう。

【ご注意】

本機能は**Home**、**Workstation**エディションでのみ利用可能です。

スナップショットの作成

システムスナップショットを作成するには、**【スナップショット】** タブをクリックします。スナップショット管理画面が表示されます。

1. **【有効にする】** をクリックし、スナップショットの保存に使用するディスク領域を決定します。スナップショットの保存に必要な領域は、OSのインストールされたハードディスク上の利用可能な空き領域やスナップショットの使用頻度によって決まります。
2. **【進む】** をクリックし、システムのスナップショットを作成します。
3. コンピューターを再起動するとスナップショットが有効になります。最初のスナップショットは、コンピューターの再起動時に生成されます。

スナップショットファイルは隠しファイルとして保存されるので、Windows のフォルダーオプション設定によっては表示されません。スナップショットファイルを隠しファイルにしているのは、誤

操作や悪影響の防止が目的であって、お使いのコンピューターの安全に関して何の問題もありません。

最初のスナップショットが有効になれば、以降はスナップショット管理画面の【作成】をクリックすることで、新しいスナップショットを作成できます。バックアップ機能と違い、スナップショットファイルの保存場所を選択する必要はありません。スナップショットは、以前に作成されたファイルに自動的に追記されます。新規スナップショットを作成してみるだけならコンピューターの再起動は不要です。

さらに、スナップショット仮想保護ファイルを含むハードディスクやパーティションは、本製品のさまざまな画面で「保護あり」と表示されます。仮想保護ファイルを保護するため、「保護あり」と表示されたハードディスクやパーティションへの書き込みは許可されません。スナップショットを無効にするまでの間、「保護されたパーティションや保護されたディスクのバックアップとクローン」はできますが、「バックアップ先やクローン先に保護されたパーティションや保護されたディスクを使用する」ことはできないということです。

スナップショットの削除

【スナップショット】タブに切り替えます。名前や作成日時などから、削除したいスナップショットを一覧の中から見つけ、「削除」をクリックします。

スナップショットで使用される本製品のアルゴリズム上、複数のスナップショットがある場合、スナップショットをひとつ削除するとそれ以前のスナップショットはすべて消え、最新のスナップショットのみが保存されます。

また、すべてのスナップショットが削除されると、自動で新規スナップショットがひとつ作成されます。つまり、スナップショットが常にひとつは存在するということです。

スナップショットによるシステムの復元

スナップショットからシステムの復元をおこなうには、**【スナップショット】** タブをクリックしてください。名前や作成日時などから、使用したいスナップショットを一覧の中から見つけ、「復元」をクリックします。

ある時点のスナップショットを使用して復元すると、それ以後に作成されたスナップショットはすべて消えます。多くの時点でのスナップショットがある場合、操作をおこなう前にシステムパーティションのバックアップを実行しておくことを強く推奨します。

スナップショットを無効にする

スナップショット機能の使用を中止したいとき、**【スナップショット】** タブに切り替え、**【無効にする】** をクリックします。コンピューターの再起動後、スナップショットが無効になります。

ツール

イメージのチェック

イメージのチェック機能を使用すると、バックアップ後にバックアップイメージファイルの品質を確認できます。作成後長期間が経過したバックアップイメージが、正常に復元できるかどうか確かめられます。チェック処理で本製品がエラーを検出した場合、そのバックアップイメージは破損している可能性があり、復元には使用できません。

1. ツール > **イメージのチェック** をクリックします。

2. チェックしたいバックアップイメージを見つけ出し、選択します。
3. **【進む】** をクリックし、チェック処理を実行します。

ブータブルディスクの作成

ブータブルメディアビルダーでは、緊急用ディスクを作成することができます。お使いのシステムにブート障害が発生したときなどに、このディスクが特に役に立ちます。製品版プログラムでは、WinPEブータブルディスクを作成でき、Freeエディションおよび体験版プログラムでは、Linux ISOブータブル CDを作成できます。(Freeエディションや体験版でも、WinPEビルダーが付属しているものについては、Windows AIKをご自身で手作業でインストールし、WinPEブータブルディスクを作成できます。)

ブータブルディスクの作成前に、空のCD-R/RW、DVD-R/RW、USBメモリ、USB外付けハードディスクなどが必要です。

1. ツール > **ブータブルディスクの作成** をクリックします。
2. ブータブルディスクにするUSBデバイスを選択するか、緊急用CD/DVDの書き込みに使用するCD/DVDデバイスを選択します。
3. **【進む】** をクリックし、ブータブルディスクを作成します。

【ご注意】

ブータブルディスクの作成が本製品のディスク作成ウィザードではうまくいかない場合、**ISOを出カ > 【参照】** の順にクリックして、ISOイメージファイルを作成し、お使いのCD/DVD書き込みソフトウェアでISOイメージから直接CD/DVD書き込んでください。

体験版や Free エディションで、WinPEビルダーが付属しているものをご使用の場合、画面内のリ

リンクをクリックし WinPEビルダーを呼び出し、WinPEブータブルディスクを作成できます。

USBデバイスでブータブルディスクを作成したい場合、最初にアクティブパーティションを作成する必要があります。

Linux ブータブルディスク

Freeエディションおよび体験版プログラムの場合、デフォルトではLinuxベースのブータブルディスクが使用できるようになっています。このブータブルディスクでは、[「ディスク&パーティションリストア」](#)と[「クローン」](#)の機能のみ使用できるという点にご注意ください。体験版プログラムでも、あらかじめ Windows Automated Installation Kit (AIK)を手作業でインストールし、「WinPEビルダーの機能を使用する」または「WinPE ISOファイルのエクスポートをご自身でおこない、その後お使いのCD/DVD書き込みソフトウェアを使用する」ことでWinPEブータブルディスクを作成できます。

WinPEブータブルディスク

Windows PEブータブルディスク作成機能は製品版で使用できます。このブータブルディスクは最小限のWindows 7環境をベースにしており、この環境下で利用できる機能はPreOS環境での実行時と同じです。詳しくは、[「Windows PEとWindowsの違い」](#)の章をご参照ください。

データの消去

選択したディスクやパーティション内のデータを復元不能な状態に消去します。「**消去回数**」欄で、データ消去時の上書き回数を指定します。データ消去の操作を始めると元には戻せず、データは二度と復元できなくなりますのでご注意ください。

イメージのマウント/アンマウント

マウント

バックアップイメージ内のファイルを参照したりファイル内のデータを確認したりするために、イメージのマウント機能を搭載しています。正しいパーティションイメージであることを確認してから復元をおこなうことができます。マウントしたイメージから、指定したファイルのみをコピーして取り出したりすることができます。

1. 「マウント/アンマウント」をクリックします。
2. 一覧からイメージファイルを選択するか、【参照】をクリックしてイメージファイルの場所を指定後、【次へ】をクリックします。
3. いつの時点のイメージファイルのマウントするのを選択し、【次へ】をクリックします。
4. ドライブ文字の横に表示される下向き三角形(▼)をクリックすると、任意のドライブ文字を割り当ててマウントすることができます。
5. 【進む】をクリックすると、マウントを開始します。

【ご注意】

選択したバックアップイメージファイルがパスワード保護されている場合、手順3で【次へ】をクリックしたときにパスワード入力を求められます。

マウント後のドライブ内のデータに対して完全にアクセス権限を持てるよう、バックアップイメージ作成者と同一の管理者権限のあるユーザーアカウントでマウントすることをおすすめします。

マウントできるのは、パーティションイメージまたはディスクイメージ内のパーティションのみです。

アンマウント

仮想ドライブのマウント状態を維持するにはかなりのシステムリソースを消費します。必要な操作が完了したら、仮想ドライブを**アンマウント**することをおすすめします。「**マウント/アンマウント**」をクリックし、マウント中の仮想ドライブにチェックを付け、**【アンマウント】** をクリックします。

アンマウントの操作をしなかった場合でも、コンピューターのシャットダウンや再起動をすると自動的にマウントが解除されます。

イメージの変換

本製品のバックアップイメージファイルを他ツールの仮想ディスクファイルに変換することができます。「管理」の画面から実行するか、以下の手順で変換します。

1. 「**イメージの変換**」をクリックします。
2. **【参照】** をクリックし、変換したいバックアップイメージファイルの場所を指定します。
3. 変換後のファイルの保存場所を、**【参照】** をクリックして指定するか、「**保存先**」欄にパスを手入力して指定します。
4. VMware用の仮想ディスクファイル(拡張子「VMDK」)に変換したい場合、「**種類**」のリストで「**VMware**」を選択します。Virtual PC用(拡張子「VHD」)に変換したい場合は「**Virtual PC**」を選択します。
5. **【進む】** をクリックし、変換処理を実行します。

テープ管理

長期のデータ保存のためテープデバイスにバックアップイメージを保存する場合、ラベル貼付などをしておかないとテープに何が入っているかわかりにくくなる場合があります。この機能は、使用す

るテープの管理用に使用します。

「**テープ管理**」をクリックすると、検出されたテープがダイアログボックスに一覧表示されます。一覧に表示される情報から各テープの内容がわかります。テープ内のイメージファイルを削除したい場合、イメージファイルを選択して**【消去】**をクリックします。

Pre-OSを有効/無効にする

【ホーム】タブの「**プリOSを有効にする**」「**プリOSを無効にする**」をクリックすると、本製品の**PreOSモード**での実行を有効にしたり無効にしたりすることができます。PreOSモードをオンにすると、ウィンドウ上の文字が「PreOSを有効にする」から「PreOSを無効にする」に変わります。そして、PreOSモードをオフにすると、「PreOSを無効にする」から「PreOSを有効にする」に変わります。

PreOSモードが有効になると、コンピューター起動時のブートメニューに本製品の名前が加わりま
す。それを選択すると、Windowsを起動せずに本製品のPreOSモードに入れます。

Pre-OSモード

PreOSとは、シンプルなおOS環境だとお考えください。本製品では、Windowsにログオンしていない状態やブータブルディスクを作成していない状態でも、このPreOS環境下でバックアップや復元を実行することができます。OSにブート障害が発生したときなどに特に役に立ちます。PreOS環境にログインし、ブート障害の発生以前に作成したバックアップイメージで復元し、トラブルを簡単に解決することができます。

本製品では2種類のPreOS環境があり、どちらを使用できるかはご利用のエディションによって異なります。

Freeエディションと体験版プログラムでは、LinuxベースのPreOSモードを使用できます。Linux

PreOS環境下では、「ディスク&パーティション復元」と「クローン」の機能のみ使用できます。

製品版プログラムでは、Windows PE(WinPE)モードを使用できます。本製品のWinPEのバージョンは3.0で、シンプルなWindows 7ベースの環境下です。Windows環境へのインストール時に利用可能な機能のほぼすべてを WinPE環境でも使用できます。Freeエディションや体験版プログラムをご利用の方も、Windows AIKを手作業でインストールし、WinPEブータブルディスクの作成 または WinPE ISOファイルの出力をご自身でおこなうことで、WinPEモードを使用できます。

【ご注意】

PreOSモードや、ブータブルCD、ブータブルUSBデバイスブートでの使用時は、バックアップイメージファイルのパスがASCII標準に準拠していることをご確認ください。

WinPEとWindowsの違い

Windows上での使用時とほぼ同じ機能を、WinPE 環境でも使用することができます。しかし、実行環境が異なるため、一部の機能については別の便利な機能で置き換え、作業を容易にしました。

Windowsシェルコマンド

MS-DOSコマンドのウィンドウを呼び出します。さまざまなユーザーコマンドを入力して、バックアップタスクをより効率的に、安全に実行できます。具体的には、パーティションのバックアップ前に「CHKDSK」コマンドを実行してエラーのチェックを行う、「drvload」コマンドを実行してハードウェアドライバーの追加を行う、といったようなことです。

1. WinPE環境やPreOS環境で、「Windows シェルコマンド」をクリックします。
2. ポップアップウィンドウにコマンドを入力後、「Enter」キーを押して実行します。
3. 「exit」と入力し、「Enter」キーを押すと、本製品のメイン画面に戻ります。

デバイス管理

ここでは、ネットワークドライブの割り当て、IPの構成、ドライバーの追加をおこなえます。

ネットワーク管理

「**デバイス管理**」をクリックし、「**ネットワーク管理**」を選択後、**【次へ】**します。

ネットワークドライブの割り当て - ネットワークドライブを割り当て、ローカルディスクのように扱います。ネットワークドライブからのバックアップ、ネットワークドライブへのバックアップが可能になります。

ネットワークドライブの編集 - 割り当てたドライブのパラメーター変更をおこないます。

ネットワークドライブの切断 - 操作の完了後、ネットワークドライブの割り当てを解除します。

IP設定 - IPパラメーターの構成をおこないます。

ドライバー管理

PreOS環境下では、ハードウェアRAID、SCSI、一部の種類のストレージやネットワークカードは、ドライバーを使用しないと直接認識させることができません。この機能を使用すると、ドライバーのインストールと操作の円滑な続行が可能か確認することができます。

1. 「**デバイス管理**」をクリックします。
2. 「**ドライバー管理**」を選択し、**【次へ】**をクリックします。お使いのハードウェアRAIDやネットワークカードのドライバーの存在する正しいパスを指定し、インストールします。

【ご注意】

本製品の WinPEバージョンは32ビット版Windows 7ベースですので、これに対応するバージョンのドライバーを使用する必要があります。

MBR修復、パーティションのチェック

「**MBR修復**」を使うと、MBR破損に起因するブート障害を解消できる場合があります。この操作は、MBRセクターに新しいブート情報を書き込んでブート障害を終了させるというものです。この機能はPreOS環境やWinPE環境での実行時、**【ホーム】** タブの **【ツール】** の中にあります。「**MBR修復**」をクリックし、修復対象のディスクを選択後、**【進む】** をクリックします。

「**パーティションのチェック**」を使うと、指定されたパーティション上のエラーの有無を検証したり、それを修復したりできます。論理エラーのあるパーティションの使用は、バックアップ失敗の原因となることがあるため、バックアップツールを使用する前には、パーティションのチェックを実施し、エラーを修復する必要があります。この機能はPreOS環境やWinPE環境での実行時に利用可能です。「**パーティションのチェック**」をクリックし、チェック対象のパーティションを選択します。「**ファイルシステムのエラーを自動で修復する**」を有効にすると、処理の後、エラーが修復されます。**【進む】** をクリックし、操作を開始します。

iSCSIイニシエーター

iSCSIデバイスへの接続および構成をおこないます。

iSCSIターゲットデバイスへの接続方法は2種類あります：

クイック接続

1. **【ターゲット】** タブで、「**クイック接続**」欄にターゲットデバイスの名前またはIPアドレスを入力後、「**クイック接続**」をクリックします。「クイック接続」ダイアログボックスが表示されます。
2. 指定されたターゲットポータルで複数のターゲットが利用可能な場合、一覧が表示されます。利用するターゲットをクリックし、「**接続**」をクリックします。
3. **【完了】** をクリックします。

高度な接続

1. **【探索】** タブをクリックします。
2. ターゲットポータルを追加するには、**【ポータルの探索】** をクリックし、次に、接続するターゲットポータルの**名前**または**IPアドレス**を入力します。必要に応じ、接続用代替 **TCPポート**も入力できます。
3. **【OK】** をクリックします。

接続に成功すると、接続した iSCSIハードディスクドライブは物理ドライブと同様に本製品でバックアップ、復元などの操作をおこなえるようになります。

PXE Server

PXE(Preboot eXecution Environment)は、データストレージデバイスやインストール済みのOSとは関係なく、ネットワークインターフェースを使用してコンピューターをブートする環境です。EaseUS Todo Backup PXE サーバーは、ターゲットマシン上でEaseUS Todo Backup復元環境をネットワークブートさせることができます。特にベアメタル復元やネットワークデプロイメントで役立ちます。

この機能は、Technician エディション、Advanced Server エディション、Server エディション および それらの体験版で使用できます。

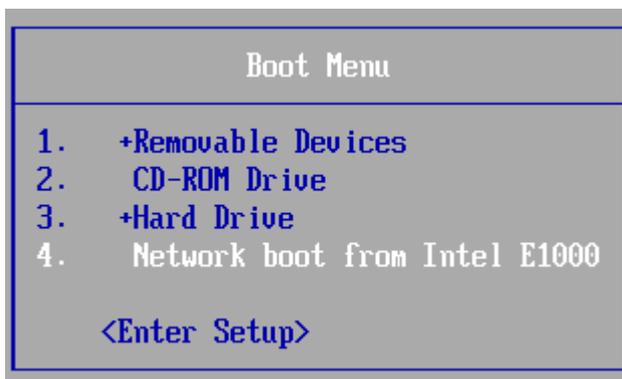
【ホーム】 タブの「**PXEを有効にする**」をクリックします。ブートイメージディレクトリの構成処理が自動でおこなわれます。

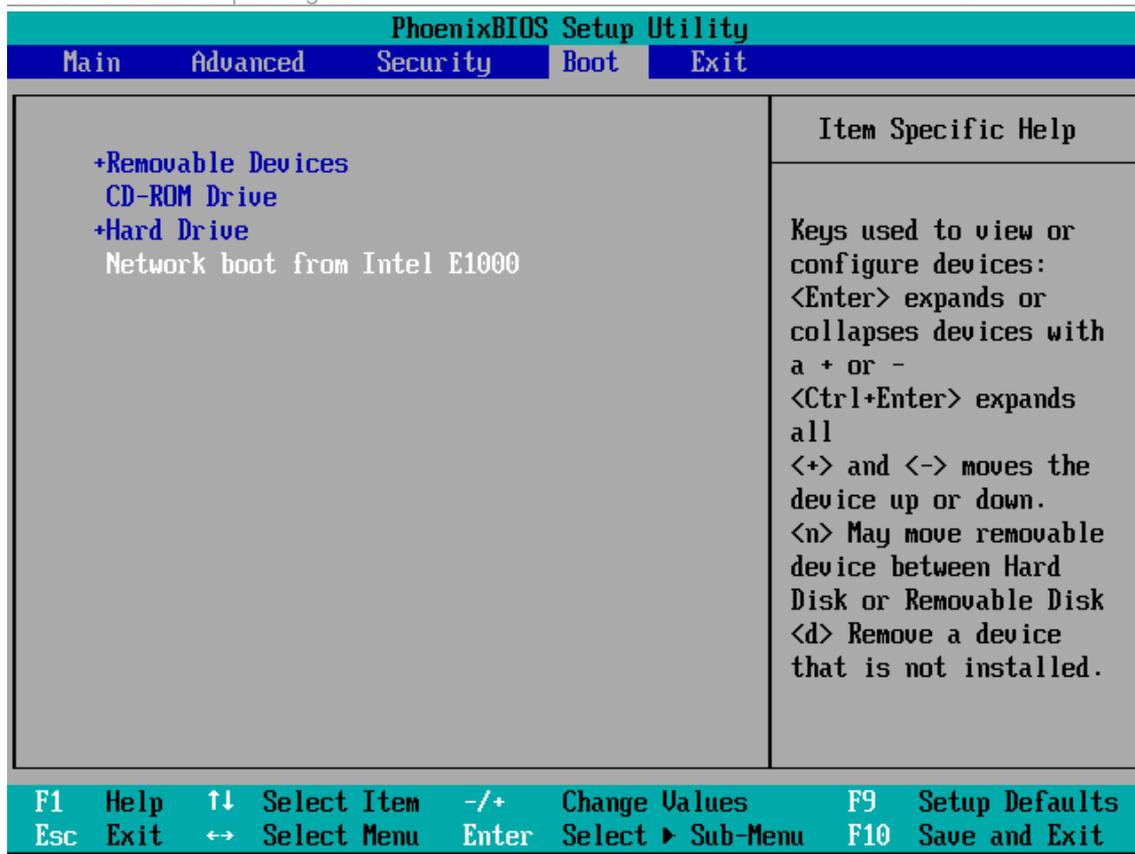
【ご注意】

ネットワーク上で DHCP(Dynamic Host Control Protocol) が機能していることをご確認ください。ブート中のコンピューターがIPアドレスを自動取得し、EaseUS Todo Backup復元環境に入れるようになります。



クライアントマシンのネットワークインターフェースカードがPXEブートをサポートしていること、BIOS画面で「Network boot」が選択できることをご確認ください。PXE サーバーへのネットワーク接続が利用可能なら、クライアントマシンがネットワークからブートするでしょう。





ログ

メイン画面左上部の製品アイコンをクリックし、「ログ」を選択すると、ログ一覧が表示されます。

ログには本製品がおこなった操作の内容と各操作の成否が記録されるので、バックアップタスクが正常終了したかの確認に使えます。

ログファイルに対して次の操作がおこなえます：

【更新】 - 一覧を更新し、新規作成されたログファイルを開きます。

【クリア】 - ウィンドウに表示されている既存のログファイルを削除します。

【すべて出力】 - ログの内容をテキスト(.txt)または Microsoft Excel(.xls) の形式で出力します。

【表示】 - ログファイルの詳細を表示します。失敗したタスクのエラーコードの文字が表示されます。

ログをお送りいただくと、ログの情報をもとに弊社で詳細な問題の解析とタスク失敗の原因調査を実施することができます。

タスクの**開始時刻・終了時刻**、**キーワード**を使用してログの検索をおこなうこともできます。

その他の操作

処理完了後コンピューターをシャットダウンする

このオプションを有効にすると、コンピューターを放置して実行することができます。つまり、処理の完了後コンピューターをシャットダウンする必要がある場合、このオプションにチェックを入れると、コンピューターから離れても問題ありません。

このオプションはバックアップ/復元/クローンのどの処理でも利用できます。このオプションは、実際に処理が実行された時に表示されます。

Windowsエクスプローラーでイメージ内部を参照

バックアップ後、イメージファイルに直接アクセスできます。イメージファイルに含まれるデータの確認はもちろん、指定したファイルを開いたり、コピー・復元することができます。選択したファイルの (1)バックアップ元の場所への復元、(2)場所を指定して復元、の両方が可能です。

PBD形式のイメージファイルをダブルクリックまたは右クリックメニューから参照できます。目的のファイルを見つけて右クリックするとメニューが表示され、ファイル操作をおこなうことができます。

【ご注意】

この機能は、Windows 2000では使用できません。

Windowsエクスプローラーからバックアップを開始

バックアップしたいドライブやフォルダーをWindowsエクスプローラーで右クリックし、メニューの**EaseUS Todo Backupでバックアップ** をクリックすると、バックアップタスクを直接開始でき、素早く簡単にバックアップを行えます。

バックアップ対象の選択後、設定用のダイアログボックスが表示され、下記の設定をおこなえます。

1. 作成するバックアップイメージの名前、説明欄
2. バックアップイメージの保存先

初期設定から変更するにはフォルダーのボタンをクリックします。

3. 既存のイメージファイルへの追加を選択する場合、**「イメージの保持方法」**を指定し、以前のイメージファイルを削除する必要があります。
4. **「バックアップオプション」** をクリックすると、高度なオプション設定をおこなうことができます。

【ご注意】

Windowsエクスプローラーからバックアップ開始する前に、EaseUS Todo Backupが実行中の場合はあらかじめ終了しておいてください。

この機能はWindows 2000では利用できません。

サポート

EaseUS Todo Backupの詳細情報は、弊社ウェブサイトをご覧ください：

<http://backup.easeus.jp>

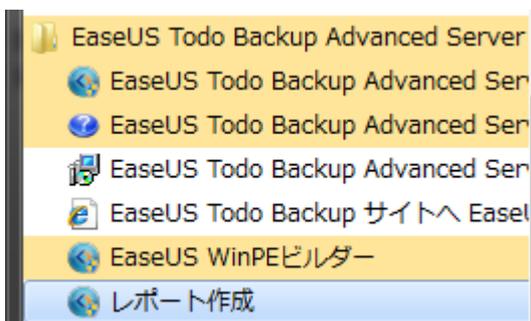
探している情報が見つからず、さらに支援が必要な場合、EaseUS Technical Supportへメールでお問い合わせください。メールアドレス： support@easeus.jp

ソフトウェアのご使用中に問題が起きたら、弊社でよりよい手助けができるよう、レポートを作成してお送りください。

レポートを作成するには、EaseUS Todo Backupメイン画面の「レポート作成」をクリックしてください。



Windowsスタートメニュー内の下図のショートカットからも作成できます。



トラブルシューティング

1. エラーメッセージ「イメージファイルが不完全であるか、見つかりません」が表示されました。

この場合、以下をご確認ください。

- (1) バックアップイメージの保存先パスが、存在する/しない
- (2) バックアップイメージの保存先パスへのフルアクセス許可がある/ない

上記2点を確認しても問題が解決されない場合、バックアップイメージファイルをローカルハードディスクに転送し、それから復元してみることをおすすめします。

2. イメージファイルを1つ削除するときに「複数のイメージファイルを削除する必要があります」と表示されるのはなぜですか。

増分バックアップイメージが複数存在する状況でそれらの増分バックアップのベースとなるフルバックアップイメージを削除しようとした場合、増分イメージもすべて削除されます。増分バックアップにおいて、これは正しい動作です。

3. これまでフルバックアップをまったく作成していないのですが、増分バックアップを実行することはできますか。

できません。増分バックアップは、フルバックアップをベースにしなくてはならないので、増分バックアップの前にならずフルバックアップが完了している必要があります。

4. 隠しパーティション、ドライブ文字のないパーティションをクローンすることはできますか。ま

た、それらのパーティションが含まれるハードディスク全体をクローンすることはできますか。

できます。

5. NTFSパーティションをクローン後、ファイルシステムが「RAW」と表示されたのですがなぜですか。データにはアクセスできないのですか。

クローン元(複製元)のNTFSパーティションが「書き込み禁止」になっていないか確認してください。書き込み禁止になっていれば、解除して再度実行してみてください。

6. OSをCDにバックアップしておく、ということはできますか。

できます。ただし、円滑な復元処理を考えた場合、CDではなくローカルディスクや外付けハードディスクへディスクイメージを保存する方がよいでしょう。

7. 「スナップショット」の機能を、デュアルブート環境やマルチブート環境で使用できますか。

できません。スナップショット機能は、シングルブートのコンピューターでの使用を前提に設計されています。複数のOSが共存するコンピューター環境ではご使用にならないでください。問題を引き起こす可能性があります。

8. バックアップの完了後、バックアップイメージファイルと同じ名前の親フォルダーが毎回必ず作られるのですがなぜですか。

バックアップのタスク/プラン数やイメージファイル数が膨大になったとき、タスク/プランごとにイメージファイルがまとまっている方が識別や管理がしやすくなるため、本製品ではイメージファイルと同名の親フォルダーを自動作成する仕様としています。

9. バックアップイメージファイルを参照し、中から必要なファイルを取り出して保存しようとしたのですができません。なぜですか。

Windowsには、ファイルのパスとファイル名の長さに制限があり、ファイルを保存する際、フルパスの合計文字数が255バイトを超えてはいけません。バックアップの内容にパスやファイル名の長いものが含まれている場合、パス名の短い場所を指定し、再度保存してみてください。

10. 復元が終わったのですがファイルが見あたりません。どうしたら見つけられますか。復元中にエラーなどは発生せず、処理は100%に進んでいました。

「隠しファイル」属性のため非表示になっている可能性があります。Windowsエクスプローラーの「フォルダーオプション」を開き、「隠しファイルを表示する」の設定が有効になっていることを確認後、エクスプローラーでファイル検索を試みてください。

11. Windowsエクスプローラーや、その他のファイル管理ソフトで、バックアップイメージのファイル名変更や移動といった操作をしてもいいですか？

それらの操作をするのはおやめください。予期せぬ問題の発生を防止するために、バックアップイ

イメージのファイル名変更やバックアップ先の変更といった操作は、本製品の「管理」からおこなってください。この操作であれば、本製品がバックアップイメージの詳細を記録・把握し続けることができます。

12. WinPEやPreOSモードで使用していると、RAIDハードディスクやSCSIハードディスクが認識されないのですが、なぜですか。

すべてのハードウェアドライバーが本製品に搭載されているわけではないためです。この状況では、手でドライバーを追加する必要があります。この操作は「ホーム」タブの「Windows シェルコマンド」または「デバイス管理」から行えます。

13. ディスクの表示やフォルダツリーの展開をしようとしたとき、長時間プログラムが応答せずマウスカーソルが処理中の形状になることがあります。なぜですか。

バックアップや復元に直接関係のないデバイスが多く接続されていると起こりやすい症状です。ディスクの表示やフォルダの展開の操作の際、本製品は接続されている全デバイスのリストを作成しようとします。そのため、接続されているデバイスの数が多いほど、本製品のパフォーマンスが低下します。必要のないデバイスの接続を取り外したり、CD/DVDのトレイからディスクを取り出したりすることで改善できます。

14. ファイル「pagefile.sys」はバックアップ対象から除外されると思っていたのですが、このファイルが毎回自動的にシステムイメージの中に含まれています。なぜですか。

本製品がシステムイメージを作成する際、実は「pagefile.sys」は除外はされずにイメージ内に含まれます。実際には、ファイルサイズを0KBとして扱い、このファイルの属性のみをイメージに含めています。

15. パーティションをセクタバイセクタ方式でバックアップしましたが、元の場所に復元させてもらえません。なぜですか。

復元後のパーティションが正しく機能するよう、EaseUS Todo Backupがパーティションの開始セクターを再調整しなくてはならないときがあります。しかし、セクタバイセクタ方式で復元の場合、パーティションのサイズ変更はおこなえないため、復元用の領域が十分でない可能性があります。復元用の領域を確保するため、最初にパーティションのサイズ変更を行うか、もっと容量の大きいディスクへ復元することをおすすめします。

16. ダイナミックボリュームを容量の大きいものへクローンしましたが、Windowsエクスプローラーで表示されるボリュームサイズがWindowsのディスクの管理での表示と違うのはなぜですか。

ダイナミックボリュームをクローンするとき、OS上のクローン先ボリュームの情報は変更されないため、ディスクの管理でのボリュームサイズはクローン前と同じままです。しかし、セクタバイセクタ方式クローンを使うと、ボリュームパラメーターも含めすべてのデータがクローン後のボリュームに保持され、利用可能な領域がクローン元のボリュームと同じになります。

17. 元のパーティションと同一サイズのパーティションにクローンや復元するとき「書き込み先パーティションの領域が小さすぎます。」と表示されるのはなぜですか。

元のパーティションの空き領域がないときに発生する可能性があります。セクタバイセクタ方式クローン/復元で再試行してみてください。

用語集

バックアップ

データロスの発生後などにトラブル前の元の状態に戻せるようにするため、データをひとつまたは複数コピーすることのことをいいます。本製品によって作成されるバックアップファイルには、「PBD」の拡張子が付いています。

ミラーイメージ

ミラーイメージはデータストレージメディアやストレージデバイスの中の完全な内容とファイルやフォルダーの構造が含まれた単独のファイルです。このイメージを使うと、ハードディスクやパーティション、重要なファイルやフォルダーを別のハードディスクやパーティションへ転送し、将来の復元で使用することができます。

ブータブルディスク

本製品で作成できるブータブルディスクには、CD、DVD、USB メモリ、USB 外付けハードディスクなどがあります。ブータブルディスクだけで直接コンピューターをブートでき、バックアップや復元を実行できるようになっています。システムやパーティションの復元の用途に使用できます。ハードディスクからのブートが不能になった場合でも、ブータブルディスクでのブートに成功すれば、復元できる可能性があります。

増分バックアップ

増分バックアップでは、前回のバックアップ以降に変更されたファイルのみをバックアップします。フルバックアップよりも高速で、増分バックアップイメージのファイルサイズはとて小さいです。それぞれの増分バックアップは、鎖を構成するのに必要な個々の輪にあたります。バックアップを作成したどの時点にも復元できるように、複数バージョン分のバックアップが保持されます。

復元

システム障害時、ディスク障害時、データ消失時、ウイルス感染時などに、システムやパーティション、ファイルなどを以前の状態に戻す処理のことを「復元」といいます。

ユニバーサルリストア

ユニバーサルリストアを使うと、システムパーティションとアクティブパーティションをハードウェア構成の異なるコンピューターへも復元できます。マザーボードやコンピューターを新規購入した後などに、OS や各種プログラムを再インストールする必要がなくなります。

ディスク/パーティションクローン

ソース(複製元)のパーティションやディスクの内容すべてをターゲット(複製先)のパーティションやディスクへ複製することを「クローン」といい、ファイルバイファイル方式とセクタバイセクタ方式の方法があり、ソースと完全に同一のパーティションやディスクができあがります。クローン処理では、ターゲットのパーティションやディスク上のデータがすべて消去されるということにご注意ください。

システムスナップショット

ある特定の時点でのシステムの状態のことを「スナップショット」といいます。この語は、写真業界での「スナップショット」に例えて作られた造語です。本製品は、スナップショットが最後に作成された時点以降の変更を監視します。スナップショットはたいてい短時間で作成できます。スナップショットを利用すれば、破損した Windows システムを稼働状態にまで最も速く戻せます。

システムパーティション・ブートパーティション

「電源スイッチをオンにする(コールドブート)」や「Windows 使用中に再起動する(ウォームブート)」などの方法でコンピューターシステムを起動しようとするとき、毎回のブートに必要なファイルがあります(例： Ntldr)。これらのブートファイルはシステムパーティションに存在します。ダイナミックディスクでは、システムボリュームとして知られています。

ブートファイルにアクセスし、それらが役割を果たすと、システムファイル(OS の構成ファイル)へのアクセスがおこなわれ、システム開始が完了します。システムファイルはブートパーティションに存在します。ブートパーティションは、(必須ではありませんが)システムパーティションと同じパーティションにすることができます。

セクター

ハードディスク内の各トラックは、さらに多くの部分に分割されます。分割された各部は「セクター」と呼ばれています。セクターは、ハードディスクの最小記憶単位で、各セクターには一定量のユーザーデータが格納されます。512 バイトを 1 セクターとするのが一般的です。